



2024 日本山岳会学生部プンギ遠征隊 報告書

FIRST ASCENT

日本山岳会学生部プンギ遠征隊2024

公益社団法人日本山岳会／青山学院大学体育会山岳部／
中央大学体育連盟山岳部／東京大学運動会スキー山岳部／
立教大学体育会山岳部

原田智紀

日本山岳会学生部の遠征記録として、まとまっているものを見つけることはできなかった。この日本山岳会学生部プンギ遠征隊の前の海外登山は、おそらく2017年のザンスカールL8峰である。それ以前は毎年というわけではないが、数年に一回、学生部の遠征隊が出ていた。今回の7年ぶりというのは久しぶりと感じられる。

日本山岳会の機関紙「山岳」の62巻(1967年)に「ハンター及びフォレイカーの登頂(1966年)」という記事がある。学生部だけで行われた海外登山であり、今回のプンギ隊のように大学の垣根を越えて組織された学生部遠征隊であった。そこを起点とすると、すでに58年もの学生部遠征隊の歴史があることになる。それだけの歴史があれば、これまでに学生部が培ってきた海外登山の知恵と経験が着実に蓄積されているように思われるかもしれない。だが、学生部は毎年のようにメンバー

が変わる活動であり、卒業したらほとんどのメンバーは学生部からは離れてしまう。そのためか、遠征隊についての伝承は、参加した学生が卒業後もOBとして関わり続けられる、各大学山岳部で行われているようである。今回のプンギ隊も各山岳部の先輩方から刺激を受けていたはずであるが、彼らの言葉からは、そうした先輩を意識したものというよりも、登山を重ねるうちに「山の醍醐味をもっと楽しみたい」という気持ちが自然と高まったために発案された登山隊であり、「より高峰に登りたい」、「未踏峰に登りたい」という欲求が高まったための海外登山隊と感じられた。登山をする若者の自発的で純粋な登山計画を微笑ましく感じ、自然と応援したくなった。幸運にも私はそのチャレンジを担当理事としてサポートさせてもらった。

プンギ峰については、2022年のヒマラヤキャンプ隊が挑戦したものの、未踏として残され、

はじめに



しかも頂上につながる稜線についての情報も、下方からの写真が頼りであった。情報が少なく、その山頂を目指すことは間違いなく未知なるものへの挑戦であった。その写真と地図を見ながら、私は自分自身の高所順応についての知識と経験を伝えた。また、彼らが現地に到着してからは連日のように衛星通信を用いた位置情報と短文が届き、その日の行動を説明してくれた。こんなにも報連相をちゃんとできる学生がいるという事実、改めて微笑ましい気持ちになりながら、その活動を労い、励ました。送信可能なメッセージの文字数制限の縛りを受けながらも、意図する内容が伝わるようにするために、何度も入力し直して推敲を重ねてから送信したことも、すでに一年近くが経ち、懐かしい思い出となっている。登頂後の報道番組で彼らが私の高所順応の説明を使っていた時と、帰国後に私の返信が役立ったと直接伝えてくれた

ときには、とてもうれしい気持ちになった。

当然であるが、彼らはそれぞれ違う個性を持っている。主義や主張がいつも一緒ということもないだろう。それでも、プンギの山頂に立つという目標のために、お互いに相手を思いやり、全員一緒に登頂したことは、本当に素晴らしい。特に、ファーストアタックからセカンドアタックまで3日ほどのレストを決め込んだ時には、その決断力に脱帽した。ふつうは焦って予備日をもっと確保したくなるものである。仲間割れせずにその決定を実行できたのは、練習から一緒に長時間過ごしてきた成果でもあったのだろう。青山学院大学の井之上巧磨くん、東京大学の尾高涼哉くん、立教大学の横道文哉くんと中沢将大くん、中央大学の芦沢太陽くん、本当におめでとう。これからの人生の心の拠り所となるものができるね。そして、登山の楽しみや素晴らしさを世の中に伝え

る役割も果たしてくれたことに、日本山岳会の理事として感謝しています。

また、この登山隊をサポートしてくださった各大学山岳部の監督やOBのみなさま、2024年当時学生部を包括していたYOUTH CLUB委員会の松原尚之委員長と学生部担当のみなさま、彼らをサポートするために寄付をお寄せいただいたみなさまに感謝するとともにお祝い申し上げます。

後輩となる学生たちには、まずはこの報告書を読んでほしい。そして、同じように登りたくなったら、彼らにアドバイスを求めてください。日々の山登りに真剣に向き合い、同じ志を持っていることが伝われば、しっかり対応してくれます。そして、知識と経験に加えて知恵を引き継いでください。いつの日か、彼らが次の世代の海外登山隊をサポートする日が来ることを心より願っている。



日本山岳会プンギ遠征隊は2つの目的を本遠征に掲げている。

1つ目が「本来の登山の形の体現」である。近年様々な技術が発展したことで、登山は身近なアクティビティに変容してきた。行った事のない山 / ルート

遠征の目的と意義

日本山岳会学生部プンギ遠征隊2024

隊長 **井之上巧磨**

でも写真付きの詳細な情報を得ることができ、GPSは自分の居場所を正確に確実に教えてくれる。それは我々の活動をより安全にし、自然という不確定な環境下での確定要素を増やしてきたと思う。

しかし登山のもつ本来の側面には、未知なる山・場所・ルートを既知なるものへと変える探検的精神を含んだ営みも存在しているのではないだろうか。探検的精神を含んだ登山には、人類社会の境界を先へと推し進め、またその行為を通して人間の可能性を広げるという意味があり、いつの時代にも

必要な営みだと考える。我々遠征隊は未踏峰を登ることで、この便利な現代において、本来の登山の形を体現したいと強く思う。

2つ目は「大学山岳部の存在とその活動を広めたい」である。数十年前に存在した大学山岳部全盛期の時代は過去の





こととなり、大学山岳部はその存在や活動を世間に知られていないという現状がある。年々部員数は減少し、廃部となる大学も存在する。

今回の遠征には4つの大学山岳部からメンバーが集まっている。この遠征を通して、大学山岳部の活動や文化、

この時代にも山に青春を捧げる若者がいることを世間に発信していきたい。

まず人々に知ってもらうことは、大学山岳部を盛り上げていく第一歩であると考えます。

またこの遠征を見た次の世代が仲間として入部したり、後輩達を応援する人が増えた

ら、本遠征のもう一つの大きな意義となりえるのではないかと考える。

PHUNGI

Mountain Range: Annapurna Region / Peri Himal Range

Elevation: 6,524 m

Coordinates: 28°49'48" N, 84°24'10" E





はじめに 原田智紀 ……2

遠征の意義と目的 井之上巧磨 ……4

CONTENTS

01 ヒマラヤへ

Preparation	国内トレーニング……10
	Timeline……12
Information	プンギ概要……14
	行程図……15
Member/Staff	隊員／スタッフ名簿……16

02 足跡を残して

Strategy	行動表……20
	行動概要……21
Expedition diary	遠征日誌……22
	遠征登山の前後……69

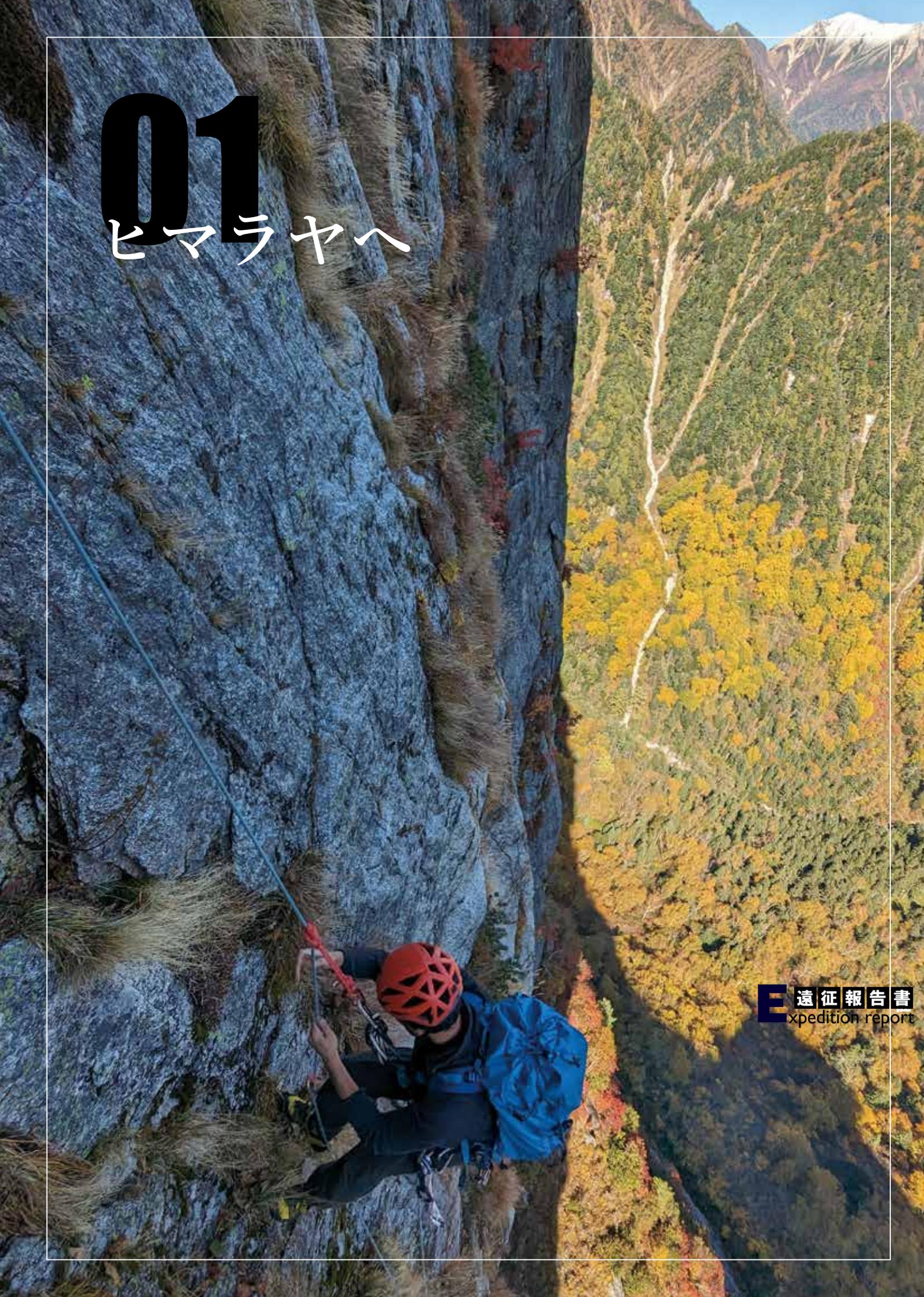
03 顧みて

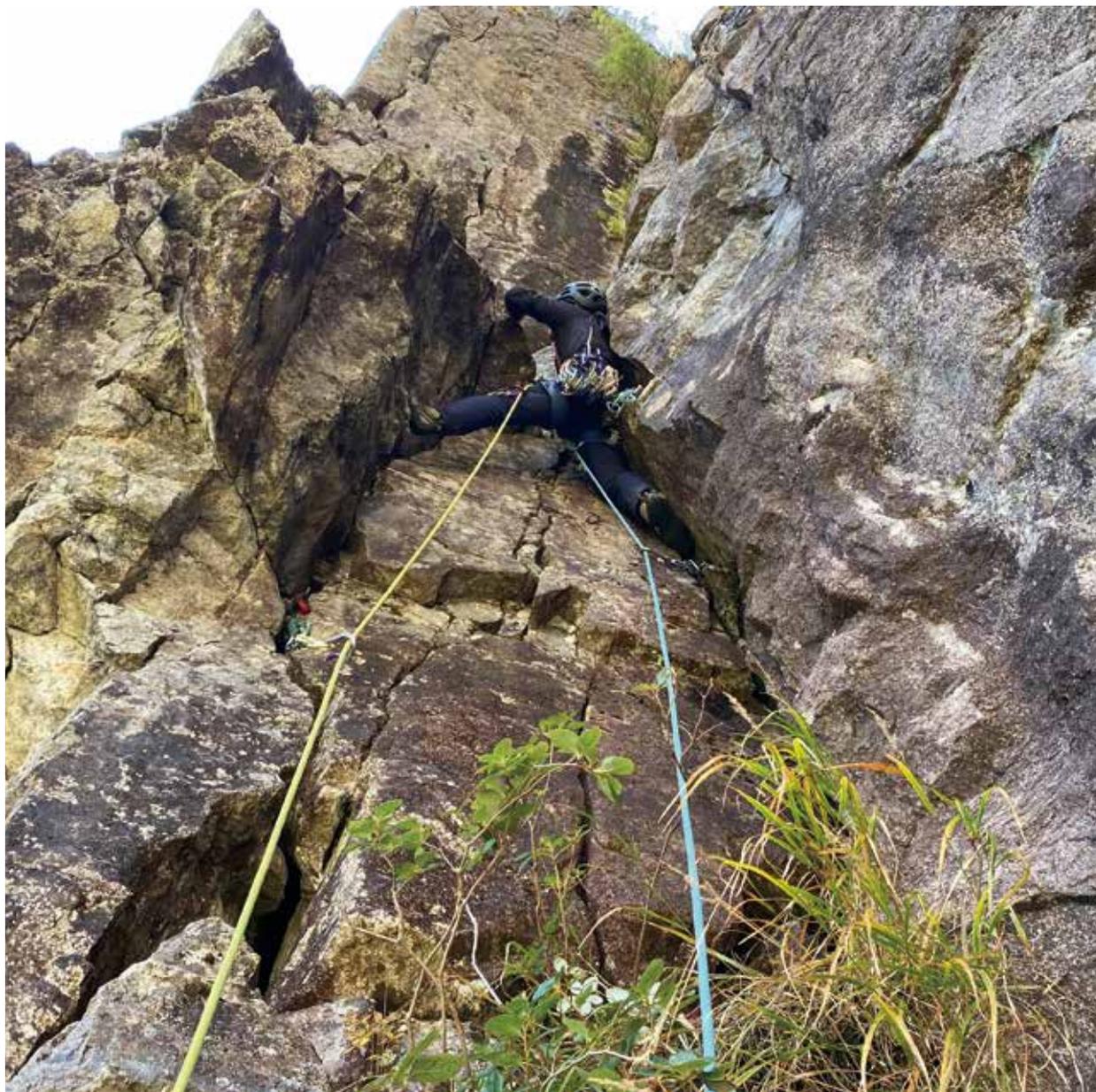
Report	装備について……72
	食料について……75
	医療について……76
	エージェント／保険……77
	会計報告……78
Impression	所感……80

01

ヒマラヤへ

E 遠征報告書
expedition report





錫杖岳 見張り塔からずっと

国内トレーニング

ヒマラヤキャンプ登山隊の報告から、プンギには高度な登攀（クライミング）技術よりも、ラッセルのための体力や、雪稜を安定して通過する技術が必要であると推測した。しかしながら、未踏であることから、ある程度どのような状況にも対応できる技術を習得しておきたい。

そこで無雪期はクライミングやアルパインを中心に、お互いのチームワークや技術

力の確認と擦り合わせを行った。

積雪期は体力を必要とする長い山行を中心に、アイスクライミングなど幅広い技術の習得及び向上を図った。

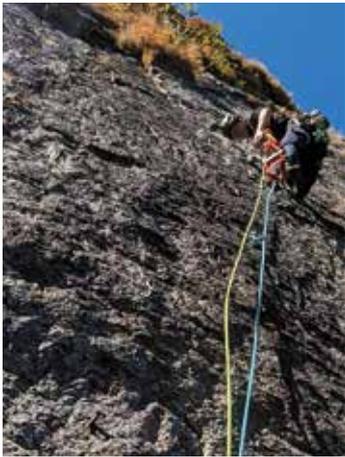
また海外遠征においてチーム仲は技術と同等以上に大切な要素だと考える。できるだけ長いこと一緒にいることで、メンバーの長所 / 短所 / 考え方 / 技術力などを知り、仲の良いチームを作ることに注力した。



剣岳 早月尾根 (2月)

Training

- ・北岳バットレス
 - ・瑞牆 山河微笑
 - ・錫杖岳 注文の多い料理店 / 見張り塔からずっと
 - ・屏風岩 雲稜ルート
 - ・八ヶ岳定着合宿 (Winter College Meeting)
中山尾根 / 阿弥陀北稜、北西稜 / 大同心大滝 /
赤岳主稜 / 南沢大滝、小滝 / 小同心クラック
 - ・蓮華岳東尾根
 - ・北海道雪崩訓練 / 層雲峡アイス 銀河の滝
 - ・剣岳 早月尾根
 - ・旭岳東稜
 - ・室堂 クレバスレスキュー訓練
- etc



屏風岩 雲稜ルート



小川山レイバック



城ヶ崎クラック練習



八ヶ岳 大同心大滝



室堂 クレバスレスキュー訓練

TIMELINE

to Expedition

2023年

- 4/26 第1回検討会（井／尾／横／青）オンライン
自己紹介、方向性決定、隊の規模、役職決め、今後のスケジュール
- 5/13 第2回検討会（井／尾／横／青）in 東大
追加メンバー検討、未踏峰検討
- 6/16 第3回検討会（井／尾／横／中／芦／青）in 東大
メンバー決定、未踏峰検討
- 9/27 計画書 書き始める
- 10/10 第4回検討会 プンギに決定
- 10/23 第5回検討会
- 10/29 ヒマラヤキャンプ2022と MTG
- 11/7 第6回検討会
- 11/29 第7回検討会
- 12/20 エージェント会社確定

2024年

- 2/25 第8回検討会
- 3/9 第9回検討会
- 3/17 エージェントに前金を渡す in 新宿
- 3/19 第10回検討会
- 4/9 第11回検討会
- 4/24 第12回検討会
- 5/8 第13回検討会
- 6/12 原田さんによる医療講習（高山病／薬）
- 6/16 第14回検討会
- 6/22 日本山岳会総会にて寄付要請&飛行機予約
- 6/24 ゆうちょ団体口座申込
- 6/30 食料計画を立てる
- 7/20 保険会社（日山協山岳共済会）決定
- 8/6 ゆうちょ団体口座拒否通知が来る
- 8/8 【やることリスト】 会計：寄付金配分、通帳関連、
持っていくお金の細かい調整 渉外：カトマンズ
宿の予約、ビザ取得、ワクチン接種、保険確定
- 8/9 海外登山助成金通過
- 8/11 α 米小分け
- 8/29 EMSにてネパールに荷物輸送
- 9/2 在京本部合同 MTG
- 9/5 出国





資金調達について

年間収入が103万円しかない学生にとって、いかに効率よく1～2年を過ごし、資金を捻出するかが重要である。以下に資金調達の方法をいくつか紹介する。

給付型奨学金の活用

キーエンス奨学金や、大学が実施している海外活動支援の奨学金に応募するのも一つの方法である。金額は数万円から50万円程度まで様々だが、採用されれば金銭面の不安はかなり減る。横道はトライして失敗していた。世の中甘くない...

死ぬ気で働く

山小屋スタッフや富士山ガイドはおすすめな資金獲得方法である。井之上と尾高は富士山八合目太子館ガイド会に所属しており、吉田ルートのガイドとして働きながら高所順化も行っていった。中沢は7月から4週間富士山頂山口屋にてアルバイトをしており、社長から特別にトレーニング時間を貰っていた。横道は、殺生ヒュッテにてアルバイトをしていた。芦沢は山では働かず、都内古書店ことBOOKOFFにて働いた。

日本山岳会海外登山助成金の活用

遠征後の報告義務が生じるが、支援が決まることが多く、申請しておくことをおすすめする。



プンギ概要



名前	: Phungi
山域	: アンナプルナ山域 ペリヒマール山群
標高	: 6524m
緯度経度	: 28° 49' 48 84° 24' 10
解禁	: 2014年
概要	: 大まかに南尾根、北西尾根、北東尾根、東尾根の4つの尾根から構成され、北西から北東には氷河が広がる。

未踏峰の探し方

遠征に行くとき決めた時、最初にやることは、隊の特徴分析と、そこからどのような山をやりたいのかを決めることだと考える。我々遠征隊は

【強み】

- ・ 体力
- ・ 逆境に耐える精神力
- ・ 遠征に長期間時間が取れる
- ・ 長期間の登山に慣れている

【弱み】

- ・ メンバー大半が海外登山 / 高所登山経験がない
- ・ 社会人クライマーに比べると高度登攀能力に劣っている

【コンセプト】

- ・ 初めての遠征なので壁などは目指さず、あくまで登頂可能性が高い山に行く
- ・ 6000m 以上で 6500m 位の未踏峰を目指す
- ・ 未踏峰ながら既にトライした

隊が存在し、多少の情報がある山を探すということが決まった。

リサーチ

コンセプトが決まったら、それにあった山がないかを探していく。我々は、ネパール政府が2014年に発表した「List of unclimbed mountains of Nepal」の山を一つ一つ調べ、Google アースの衛星写真から可能性を検討したり、現地ガイドに連絡を取って良い山がないか聞いたり、American Alpine journal を読んで情報を集めた。

登山が終わった後、HIMALAYAN DATABASE というヒマラヤ登山記録サイトを運営する団体に取材を受けた。非常に詳しく、観光局とも繋がっているようだったの

で、情報を求めて連絡を試みるのも手かもしれない。

本隊は、ネパールのみならず、インド、キルギス、パキスタンまで広げ探した。その結果、2022 年秋日本山岳会ヒマラヤキャンプ登山隊 2022 により、プンギ南峰からの南西尾根で初めてトライされるが、未だその頂が落とされていなかったプンギが候補にあがった。

Phungi

プンギは

- ・ 6524m
- ・ 撤退点の6150mまで情報があり、写真も豊富
- ・ 撤退理由が高山病であり、求められる技術が高度順化と体力だと推察できると我々のコンセプトとマッチしており、決定となった。

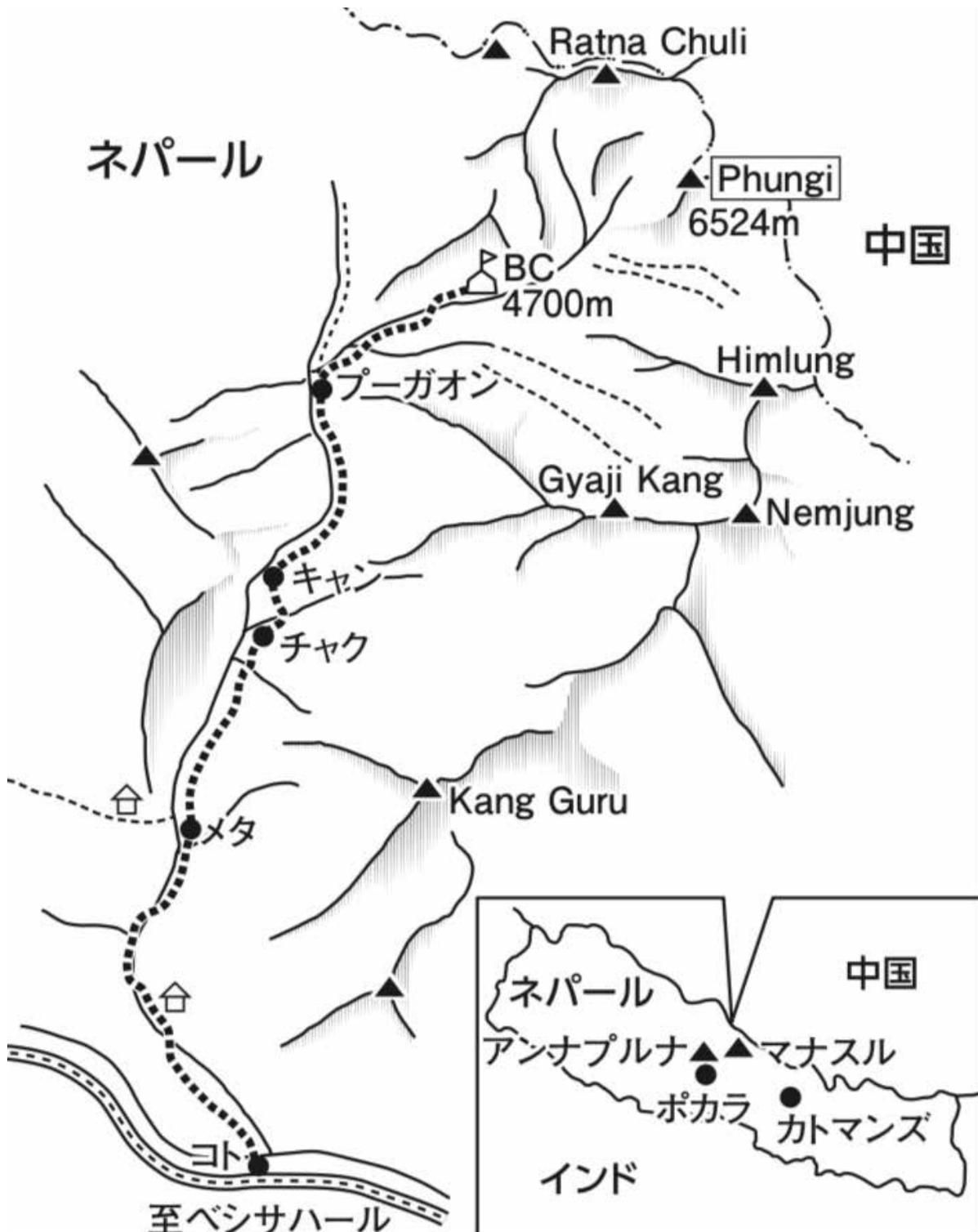
行程図

BC までの行程

アンナプルナ山域に属するプンギへは、まずバスでベシサハールへ向かい、そこからジープに乗り換えて一日かけてコトに到着する。コトから先は車が入れないため、徒歩での移動となる。メタ、チャク、キャン、プーガオンと

いった村々を経由し、徐々に高度を上げながら BC（ベースキャンプ）へと至った。

我々遠征隊は高所順化に重点を置き、時間をかけて慎重に高度を上げたため、ベシサハールから BC までに 10 日を要した。



隊員名簿



井之上 巧磨

所属：青山学院大学体育会山岳部 学年：4年(22歳) 役職：総隊長 / 食料サブ
実績：池郷川下部ゴルジュ、下棚沢、中崎尾根末端 - 槍ヶ岳、阿弥陀岳北西稜

ロマンは我慢できない

井之上なくしてこの隊にあらず。本遠征の立案者である彼は、最後まで指揮を取り続け、メンバー全員を登頂へと導いた。隊がひるみ、勢いを失いかけた時には、持ち前の明るさで、誰よりも頑張る力強い背中中、私たちを鼓舞する。また、キャン村では動画撮影中のスマホを通り過ぎりの現地ネパール人にくれてやる(iPhone盗難事件)ほどの器の大きさを見せつけ、我々を驚かせた。スマホを盗られて以降は、デジタルデトックス生活に突入し、アナログの申し子へと変貌を遂げる。自然派でロマンチストな井之上とふたり、カトマンズの安宿の屋上から見た燃えるような夕焼けを今でもよく思い出す。(担当: 中沢)



尾高 涼哉

所属：東京大学運動会スキー山岳部 学年：4年(22歳) 役職：登攀隊長 / 装備サブ
実績：イエロークラッシュ 5.12aRP、南ア主稜線縦走(2-3月)、南岳西尾根(12月)

FDポイント制度の敗

知識も登攀力も、頭のネジの外れ具合も隊の中で随一。死生観もクライマーに近く、「やりたい登山ができれば30歳ぐらいで死んでもいい」とか言っていてレベルの差を感じることが多かった。ハイキャンプでの半シュラフとジョンポリも『格』の違いを感じさせられた。C2以降の登攀もピカイチで彼がいなければ登頂はできなかつただろう。だが彼も人間。山にスキルポイントを全振りしたせいで、電波のつながるところではネットミームを口ずさみ、BCでは鬼滅の刃にハマり、朝6時からアニマル芦沢に対し、頻繁に「獣の呼吸!!」とか言ってダル絡みしていた。彼の奇行はまだまだあるが、気の毒なのでこれぐらいにしておこう。(担当: 横道)



中沢 将大

所属：立教大学体育会山岳部 学年：4年(22歳) 役職：装備 / 食料
実績：剣岳 源次郎 / ハツ峰上半(無雪)、早月尾根(12、2月)、旭岳東稜(2月)

息子に RCC 源次郎と名付ける予定の漢

立教大学山岳部の主将を務める彼は、底知れぬ体力と熱い魂を持つ男だ。サミットプッシュ当日、早朝からの登攀・ラッセルで皆が疲労している中、頂上直下最後の雪壁にラインを引いてくれたのは彼であった。その顔立ちはネパールのライ族に似ているようで、現地ガイドたちからはネパール語で「ライ族の小僧」を意味するライカンツアと呼ばれており、我々も便乗してそう呼んでいた。持ち前のコミュ力とフレンドリーさを武器に、行く先々の人たちと楽しそうにトークを繰り広げ、土産物店ではあつという間に商品の値段を下げていくその姿はさながらネパール人であった。(担当: 芦沢)



横道 文哉

所属：立教大学体育会山岳部 学年：4年(22歳) 役職：渉外(輸送)/ 会計 / 記録
実績：槍ヶ岳西稜(無雪)、Ramdung Peak(5925m)5555m 敗退、裏同心ルンゼ

高山病? 違う弱いだけ by 横道

幼少の頃よりインターナショナルスクール(笑)に通い、外交官志望の横道。その語学力と交渉力は遠征でも活かされ、彼がいなければ我々は海すら越えられたか怪しい。一方、就活からあまり山には行けず体力は落ちていた。「高山病? 違う弱いだけ」と他の奴らにいじめられながらも、必死に歩くガッツが彼にはある。また、ラッセルでは力になれないと水作りを積極的にやったり、遠征はチームで行うものだと認識させてくれたのも彼だった。ただし、HCでカルアミルクとかいうクソみたいな曲をかけたりと、音楽的センスがないのが玉に瑕である。(担当: 井之上)



芦沢 太陽

所属：中央大学体育連盟山岳部 学年：3年（21歳） 役職：会計（保険、国内）
実績：前穂北尾根（11月）、爺ヶ岳南尾根 - 鹿島槍（3月）、蝶ヶ岳 - 燕岳（3月）

猪熊さん？ TAKEMOVIE？ 芦沢です！

我がチームの一人だけ最年少。飄々としていて、一見捉え所のない男だが、その胸には熱いスピリットが滾っている。ネパールに来て初めて判明した事だが、高所に強くラッセルマシンとして安心感があり、着実に山頂への道を切り開いてくれた。1st アタックの撤退地点手前で全員が力尽きかけている中で、ラッセルの交代を申し出てくれたのも彼である。一方で根っからの自由人であり、目を離すと一人で散歩に出掛けている。また実は可愛いものが好きであり、クロミちゃんのグッズを常用していたり、カトマンズで謎のアニマル帽子を買うなど、そのギャップでチームの空気を和らげてくれた。（担当：尾高）

現地スタッフ



サンタ マン タマン

Safe Climbing

BCまでのトレッキングではガイドとして、そしてその後はテントキーパーとして僕たちを最後まで見守ってくれた。とても優しく、朗らかな人柄で、みんなに慕われるお父さんのような存在。彼は、私たちが登山に向けてBCを出発するたびに、「safe climbing」と声をかけて祈ってくれる。その印象的な姿に、僕たちは改めて気を引き締め、遠征に臨むことができたと思う。登頂してBCに戻ったとき、彼が温かくハグをしてくれたあの瞬間、「帰ってきてよかった」と、胸に込み上げるものがあった。



ジャガティス グルン

その辺の主婦より数倍日本食作るのが上手いコック

まさかネパールの奥地で、親子丼や天ぷらうどん、ましてやすき焼きを食べれるとは思ってもみなかった。彼が作るダルバートも絶品で、下山後にぜひ作り方を教わりたく、私達は彼の家を招いてもらうことになった。玄関の暖簾をくぐるやいなや、2人の幼い女の子が元気よく飛び出してきた。彼の双子娘だ。2人はしよっちゅうおもちゃ（パピー！）の取り合いで喧嘩をするが、ジャガティス夫妻は静かに温かく見守っていた。まぶしいくらいの明るさと、溢れるような幸せに満ちた家庭。彼が働く、無機質で厳しい山の世界とは別の、優しく穏やかな時間がそこに流れていた。

ジェタ ボンジャム

頼れる我らのポーター

サンタとジャガティスと共にBCで我々を支えてくれたポーター。年齢は60歳を超えていると思うが、その体力は衰えることを知らない。驚くほど多くの荷物を籠に入れ、ナムロと呼ばれる紐を額にかけて運んでいた。2ndアタックから帰ると、わざわざ肉のある村まで降りて肉や新鮮な野菜を買ってきてくれたり、美味しい料理を食べれたのは彼のおかげである。実は奥さんが3人いてかなりのプレイボーイ。

- ツル バハドール タマン（サーダー、タマン4兄弟の長男）
- ラム カジ タマン（日本語達者、タマン4兄弟の4男）
- カルナ マン タマン（ポーター）
- ロック マン タマン（ポーター、元お坊さんでBCの祈禱も行う）
- クリシュナ タマン（ポーター、テックの兄）
- テック バハドール タマン（ポーター、ジャナクチュリトレックの主砲）

02

足跡を残して

行動表



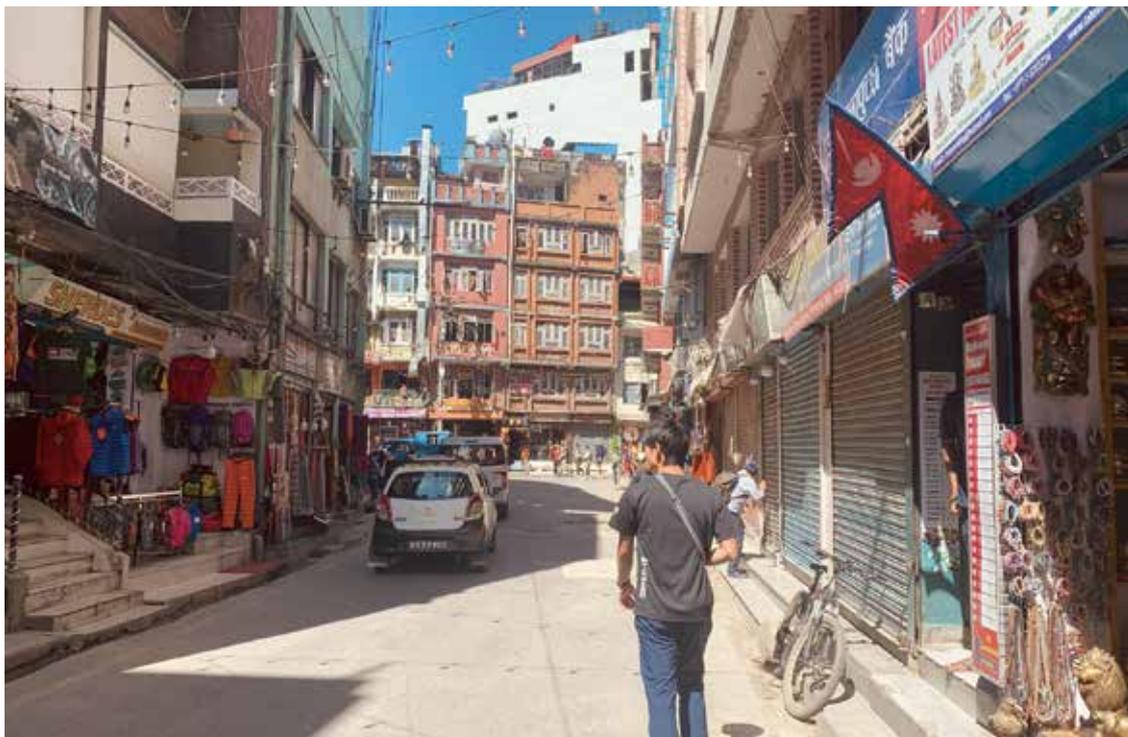
行動概要

●タクティクス

- ・遠征隊員全員が学生で、海外登山経験に乏しい。
- ・高所登山経験にも乏しい。
- ・学生であることから遠征期間を長くとることが可能である。
- ・以上の点から高所順化をじっくり行い、アタック機会を3回取れるだけの行程を組んでいた。

行動概略		
9月 5日		日本出国 (日本→シンガポール→ネパール)
9月 10日		カトマンズ→ベシサハール (823m)
9月 11日		ベシサハール→コト (2610m)
9月 13日		コト→メタ (3560m)
9月 15日		メタ→チャク (3720m)
9月 18日		チャク→キャン (3800m)
9月 19日		キャン→プーガオン (4100m)
9月 21日		プーガオン→BC (4700m)
9月 24日		C1 偵察 & 軽い荷上げ (BC → C1 → BC)
9月 25日		BC → C1 (5000m) (荷上げ)
9月 26日		C1 停滞 & C2 偵察
9月 27日		C1 → BC
10月 1日		First Attack 開始 (BC → C1)
10月 2日		C1 → C2 (5500m)
10月 3日		C2 高所順化 & HC に向けたトレースつけ
10月 4日		C2 → HC (6200m)
10月 5日		HC → 敗退点 → HC
10月 6日		HC → BC
10月 10日		BC → C2
10月 11日		C2 → HC (6300m)
10月 12日		HC → 本峰山頂 → HC
10月 13日		HC → サウス山頂 → HC → BC
10月 17日		BC → プーガオン
10月 18日		プーガオン → メタ / コトの間
10月 19日		メタ / コトの間 → ベシサハール
10月 20日		ベシサハール → ポカラ

遠征日誌【カトマンズーベシサハール】



タメルを歩く横道



移動はバイクタクシー



カトマンズ タメル地区



エージェンツ会社の屋上で荷造り

9月 5 日日本出国。シンガポールを経由して 23:00 ネパールに到着。

6 日現地準備。

両替、SIM 契約、観光局ブリーフィング、
EMS の荷物受け取り、パッキング、
不足装備 / 食料買い出し。

9 日ボダナートでチベット仏教僧の祈祷を受ける。僧侶は転生6回目だそう。

9月10日 大型バスをチャーターし、陸路で遠征の起点となるベシサハールに向かう。隊員5名、現地スタッフ8名。
バスで悪路を10時間だった。



カトマンズのカフェでチャイを嗜む



独特な情緒のあるカトマンズ



チャーターしたバス



ベシサハールの街並み

【世界の歩き方 ～カトマンズ観光編～】

カトマンズの中心タメル地区はヘンプ製品屋、偽山道具屋、レストラン、呪具屋、変な楽器と玉売りで構成されている。販売物は金額が決まっていないので値段を尋ねる。基本的に高く言われるので何度か値切ることが大切。体感最初言われる額の1/3にはなる。相場を知るために複数店舗回ることも重要である。一方、所得差から、彼らにぼられてあげるのも一つの重要な役割だと思うので、この人から買いたいと思う人から買うのが良いのではないかな。

お土産屋

・MAP HOUSE

地図や書籍、ポストカード、ポスターなどの販売元。他店はここから卸された商品売ってるので、品物は一緒だが基本10倍以上の値段が付けられている。

・Bajra Pashmina Handcraft

カシミヤマフラー専門店。かなり品質の良い本物のカシミヤマフラーが2000円以内で買える。女将が良い人で3日連続で通い、雑談したら最終的に1300円になった。使用感は両親曰く良すぎて逆に熱いらしい。

【ベシサハールーコト】



コトの村並み。この先の村に物資を運ぶためのロバが沢山いた



ジープ。運転手は無駄に崖沿いを走った



泊まっていたロッジ



途中途中にあるチェックポイント
ここでパーミッションを見せる



登れそうなボルダーに登る

・ Kalapatthar Trekking store

路面店で売ってる偽ブランド品は基本高い。この店は2階にあり初見だと行くのが難しいが、価格交渉する必要がなく路面店の半分以下で買える。Mountain blackstone というオリジナルブランドも売っている。

・ Amerita Craft

タメルで売ってる殆どのお土産はここで買える。最安値ではないが、FIX 価格で交渉せずそれなりに安く買える。

レストラン

・ New Orleans Cafe

多少高いが(って言っても1200円位)普通に恋人をディナーに誘えるくらいお洒落なお店。衛生的で料理も非常に美味しいので、困ったらここに行けば良い。

・ JAVA Coffee

多分チェーン店。割高だけど衛生的なので、入国してすぐの神経質な間は行くと良い。

【コトーメタ】



コトからは徒歩。キャラバン開始



滝の裏に切り拓かれた道。スケールが大きい



長い水平歩道が続く

- 9月11日 バスからジープに乗り換え、断崖絶壁に作られた細い道を6時間。コトに行く。
12日 高所順化のためコトに滞在。
13日 コト～メタ。コトより先は車が入れない為、いよいよキャラバンがスタートする。
コト以降は電波もなくなるため、デジタルデトックス生活突入。
14日 高所順化のためメタに滞在。



メタの入口。骸骨が異国情緒漂う



メタ村



メタ村の外観。まるでラピュタのよう

【メターチャク】



トレッキングと侮れない。全てのスケールが大きい



道の随所に存在する仏塔？



泊まっていたロッジ。ロケーションも体調も最高

9月15日 メタ～チャク。

16日 高所順化のためチャクに滞在。

17日 チャク滞在。サンタと裏山(4400m)に登る。

【世界の歩き方～ネパール語編～】

キャラバン中に覚えたネパール語（正しいかは不明）

- ・スバビアン / おはよう ・スラバートリー / おやすみ ・スバディン / Good Day ・ダンネバート / ありがとう
- ・アズ / YES ・ホエナ / No ・ホラ / May be ・ラムロウ / Good ・ナラムロ / Bad ・リゾ / 昨日 ・アザ / 今日
- ・ボリ / 明日 ・ヨウ / This ・ミト / 美味しい ・ピロピロ / 辛い ・プギョ / お腹一杯 ・ザイライナ / No thank you
- ・スイティオ / Finish ・ピスターリ / ゆっくり ・チトチト / 早い ・デーライ / 凄く ・ボルガンノス / 頑張ってる
- ・ボルガンツウ / 頑張ります ・モー / 私 ・タパイ / あなた ・ピラーロ / 猫 ・アリ / 鋸 ・ヌン / 塩 ・チニ / 砂糖 ・パニ / お湯
- ・ジャーロ アチュー / 寒い ・リノス / (何か渡しながら) どーぞ ・ディノス / 下さい ・バリオ / 強い ・マンツェ / 男 ・カナ / 料理
- ・リン / 頂きます
- ・アリカティ ディノス / もう少し下さい ・デーライ ディノス / いっぱい下さい ・モンサン ナラムロ / 天気が悪い
- ・タパイ デーライ バリオマンツェ / あなたはとても強い漢ですね（強いシェルパにかける言葉）
- ・デーライ ミトサ / とても美味しい（サムズアップしながら笑顔で女将に言うと、何故かおかわりの量が増える言葉！）



チャク村の対岸にある岩峰。井之上はフィッツロイと呼んでいた



チャク村の外観。コスモスが咲き乱れていた

【チャク〜キャン】



うっすらと雪のついた山が現れはじめる



キャン村。チャク村より小さく、この日が村開けで草刈りを手伝った



洗濯する尾高。囚人の様相

9月18日 チャク〜キャン。

朝から隊の雰囲気はピリついている。チャクの宿代が55570Rs だった。宿泊費は安いものの現金に乏しい我々には死活問題となる事態だった。これを打開する為、3つのルールができた。①ダルバートは1日1回。②お湯は買わずに自分達で作る。③30回噛んで満腹中枢を刺激する。ダルバートを食べれない精神的苦痛は隊の士気を下げ、遠征らしいピリつき(笑)を与えた。キャンには1時間半で着いた。

【キャンブーガオン】



キャンからブーガオンへの道



6000mを超える山々には雪が付く



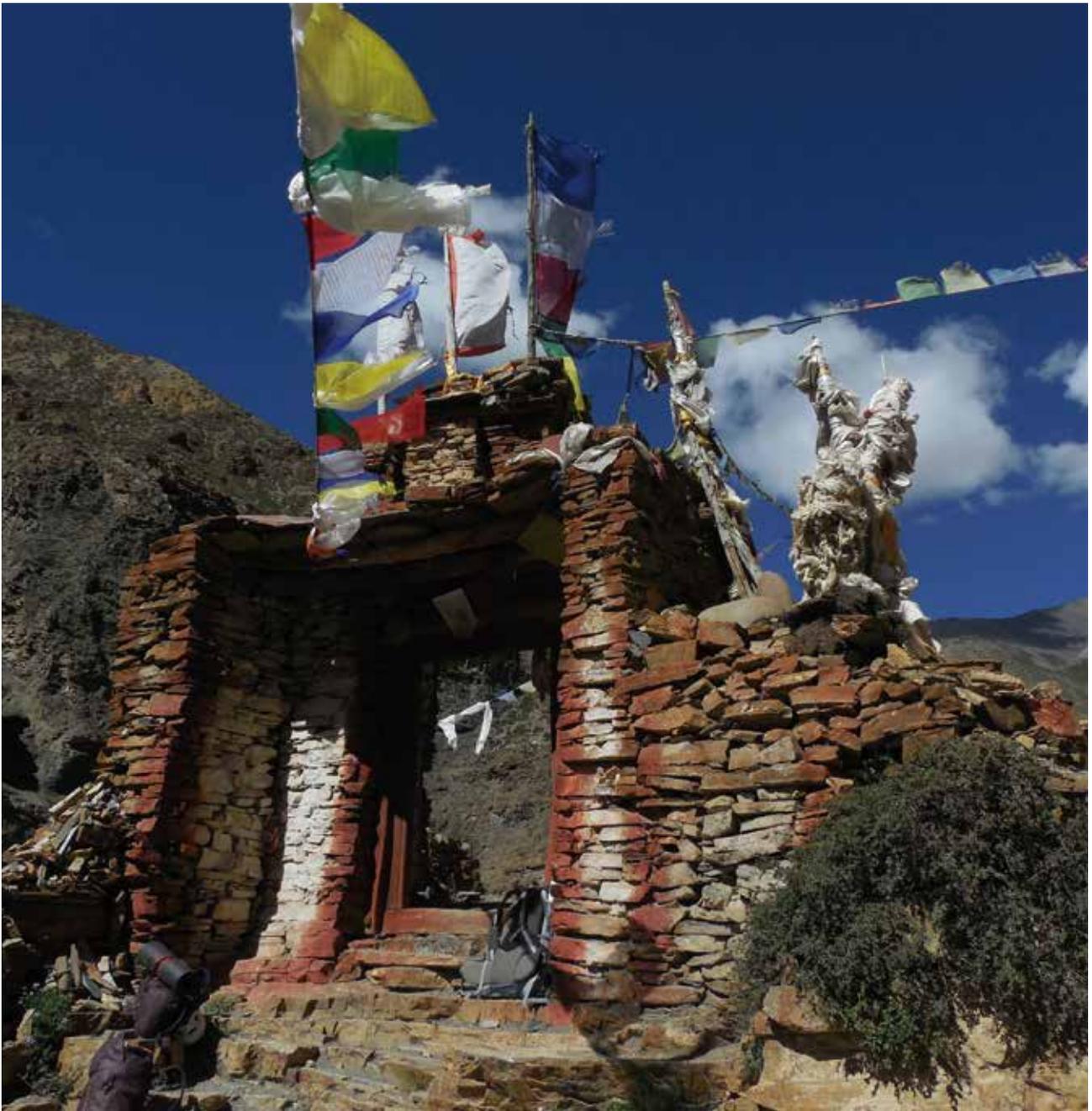
大渓谷の中を進む



谷を渡すようルンガルが架かる

9月19日 キャン～ブーガオン。最後の村。

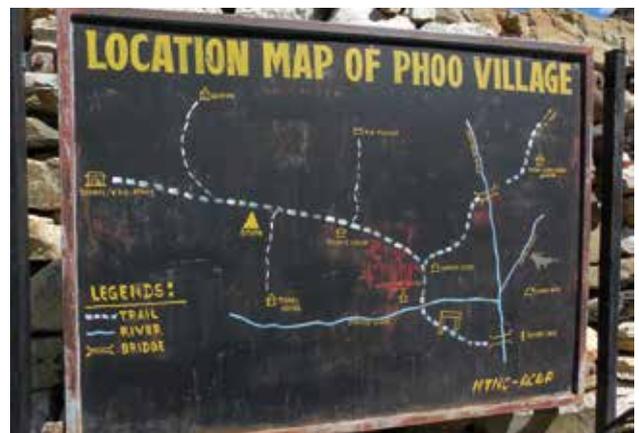
20日 高所順化のためブーガオンに滞在。村のお寺タシラカンよりプンギを確認する。ブーガオンはネパールとチベットの国境に位置する村であり、言語はネパール語でもチベット語でもない、方言のようなものを使用する。景観はまさにチベットであった。日本にいと国境に馴染みがないが、国境などというのは所詮政府が勝手に地図上に引いた線ではないのだと感じた。当たり前だが、そんな線は実際の土地には存在しないし、現地の人には関係のないものである。ブーガオンはネパールでありながら、半分チベットだし、線こそないがキャンとブーガオンの間には見えない文化的な線が確かに存在した。土地の文化は、線で途端に変わるのではなく、緩やかに自然と変化するのだと思う。



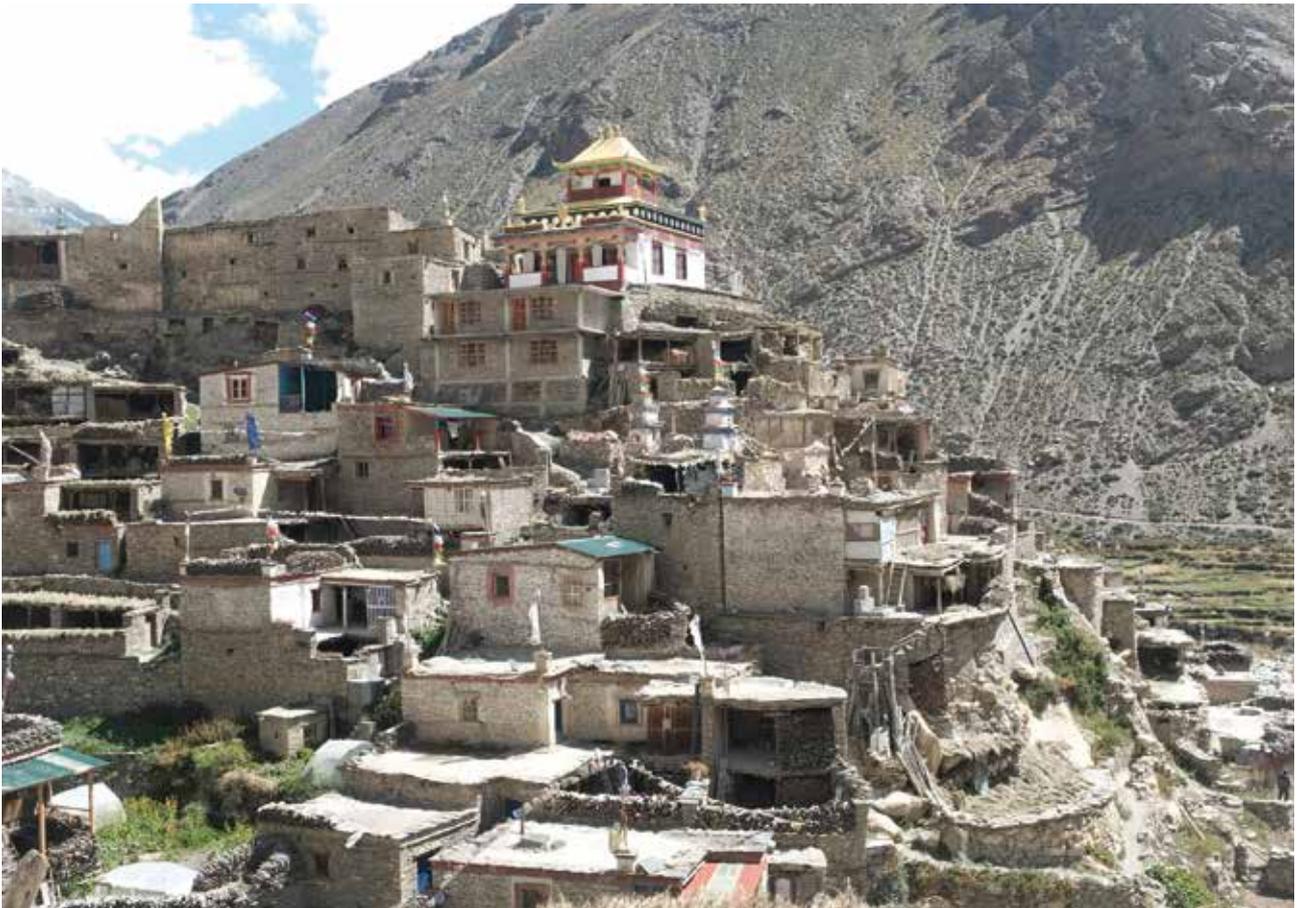
プーガオン手前



尾高の良さげな写真。彼のTシャツには『Live simply』と書いてある



プーガオン入口にある看板。右端には Way to Tibet の文字



プーガオンの村並み。景観はまるでチベット



泊まった宿の台所



宿の中庭。チベットから来たと言うチベット人とつたない英語で話した



最後の村プーガオン



プーガオンにあるタシラカンという寺。
カトマンズより来た僧侶とキャン村の
女将が案内してくれた。



タシラカンより見えたプンギ

【 Base Camp 】



隊員テントとトイレテント



ダイニングテント



キッチンテント



BC 初日の夕食はカツと鰻



天ぷらうどん（うどんは椎茸と鰹だし）

9月 21 日 プーガオン～ Base Camp.

7:20 プーガオンを出発。谷地形の中を緩く登っていくと4時間で BC 到着。長いキャラバンを終え、ようやく BC へ着いた。BC 手前でコックたちが出迎えてくれる。BC は谷間の平地にある草原に設営したのだが、Phungi 峰を望めるほか、時々ヤクなども訪れるような地上の楽園とさえ思える場所であった。また、夏の間、日本の山小屋で働いているだけあり、コックのジャガティスが作る日本食が大変美味かった（1日目はトンカツ！）。キャラバン中は予算不足のため節制令が敷かれていて、チョウメン（ネパール風焼きそば）しか食べられなかったため、大変嬉しい。やや息は切れるが、特に頭痛等はない。高所順応もとりあえず問題なさそうだ。



プジャ（祈祷）用に作られた仏塔



縦に立つのがタルチョ。斜めのがルンガル。青は空、白は雲、赤は火、緑は水、黄色は大地を意味し、経文が書かれている。



安全登山を祈念したプジャ。元僧侶のロックマンが祈る。

9月22日 Base Camp

朝食後プジャを行う。高さ1m半ほどの巨大なケルンを積み上げ、真ん中にタルチョを立てる。周囲には登攀具やお菓子、米、お金、ククリナイフが供えられ、頂上部の棒から無数の小旗を繋げたタルチョが3本張られる。ロックマンが元僧侶だったので念仏を唱えてくれ、我々は祭壇の前に敷かれたマットの上で手を合わせた。プジャは1時間行われた。途中からエージェントの人は飽きたのか後ろで雑談をしている。また祭壇設置の際にサンタが石を落っこし、下に供えられていた酒瓶が割れた。このグダグダなテキトー具合が実にネパールっぽく感じた。



C1・C2 上げる団体装備



無線機のチェックをする中沢



エージェントとの集合写真。左からロック、テック、ジャガティス、ツル、ジェタ、カルナ、サンタ



BC から見るブンギ

9月23日 Base Camp.

エージェントの人が5人帰るため見送り、C2 まで上げる装備の選定や明日の C1 偵察の準備を行う。まずは C1 まで荷上げる分も含めた荷物と食料を選定。今回は前もって C1 に装備と食料を複数回のアタックに対応できるだけ上げておく。テントは C1 用に 2 人用テント 1 つと、3 人用テントを一つ。そしてアタック用に 4 人用テント 1 つ。登攀具に関しては、C1 までは FIX ロープを 100m 分余計に持っていくこととした。また、軽量化のため、マットは 5 人で 4 枚。エアマット 2 枚の間に軽量のウレタンマットを敷き、それに直交する形で寝る。かなり狭苦しい感じだが、2,3 日程度なら耐えられるだろう。他にも諸々の装備を詰め込み、大体 20kg 弱程度。それにプラスしてアタックザックに 5kg 程度の荷物となった。準備以外は、レスト兼順応期間としてそれぞれ自由に過ごす。読書をしたり、近くの丘に登りに行ったり、近くのボルダーを登ったりなど。トランプはキャラバン中にやりすぎて飽きてしまった。

【BC ～ C1】



ブンギを目指して谷を進む。
谷底を歩く為、上部からの落
石リスクが高く気が抜けない。



台地上に作った C1。写真左の斜面から小川が流れている
左から荷物置き、尾高 / 中沢 / 芦沢、井之上 / 横道テント



石が多いのでずっと水晶探しに興じていた

9月24日 Camp 1偵察 (BC→C1→BC)

いよいよ偵察。ようやく山に入れるということで胸が高まる。最初は草原を、いくつかの小川を越えて歩く。30分ほど歩くと、谷へ降り立った。こまでは前日に軽く偵察しておいたのもあり順調に進んだが、その後のルート選択は少し気を使った。谷の右岸をずっと進んでいくが、斜面はほぼ全てボロボロの崩壊斜面であり、ところどころ段丘がある地形。歩こうと思えば歩ける場所は多いのだが、そこを上手く標高差が少なくなるように、かつ歩きやすいように繋いで歩きたい。結局、最初は無難にある程度谷底を歩いていき、最後 C1 に向けて一気に登るライン取りとなった。こうして C1 到着。C1 は沢から少し上がったところにある平坦地ですこぶる快適。カミナ4、2、ステラリッジを設営。この日の行動は歩いていると息苦しさと若干の頭痛を感じ、全員初めて高山病を意識した。井之上は人生で初めて高山病になったらしく、かなりショックを受けていた。この日は C1 に荷物を残置し、一旦 BC へ帰還する。帰りは、より楽な道を発見し行きよりは随分楽だった。



積雪前の BC

9月25日 BC ~ C1

30分に1回休憩を入れ、1.5 l の水を飲みながら C1 に上がる。違和感はあるものの全員元気。

26日 C1 停滞

天気予報と高所順化から停滞とした。C2 の偵察を少し行い、後は水晶を探して過ごす。18 時より雨が降り始め、予報も悪いため明日 BC へ戻ることが決まった。

27日 C1 ~ BC

2 時頃より雨は雪に変わり、朝起きるとテントには20cmほど雪が積もっていた。BCへ戻る。

28日 BC 停滞

雪は 10 時まで降り続き、晴れに変わった。最終的に 30cm 程度積もる。カトマンズでは大水害となったらしい。

気温が上がったことでそこら中で雪崩が起きていた。今日から 3 日間は雪崩リスクが高い為停滞とする。我々の体調はすこぶる良好で、むしろ一度帰ってきたのが良い高所順応となったようだった。雪合戦に興じ、横道の急所という尊い犠牲をだす壮絶な闘いが繰り広げられた。

30日





積雪後のBC

【First Attack】



First Attack 出発



カミナ4のポールが折れていた



ゴリラテープで修復。これで直らない物はない



アタック装備

10月1日 BC ~ C1

簡単なプジャを済ませた後First Attackに出発。今回はC2で順応後、そのまま山頂へ向けアタックする。前回と同様、谷間の道を歩いていくのだが、落石や雪崩の影響だろう、数日前とは道がすっかり変わっていて驚いた。

落石に気をつけつつ進んでいくが、突如轟音と共に、頭上から軽自動車ほどの落石が落ちてきた。急いで回避し、岩は数十m先を、火薬の匂いと土煙と共に落ちていった。幸い被害はなかったが、肝を冷やした我々はより安全な谷底の道を進んで行くこととする。そうこうしてC1到着。実は残置してきたテントが壊れているのではないかと、内心危惧していたのだが、果たしてテントは雪の重みにより圧壊していた。しかも、アタックへ使うカミナ4のポールが完全に折れていた。幸運にもゴリラテープと修復用チューブによりテントは無事修理できたが、尾高の寝袋やその他諸々の装備は完全に水没しており、すっかり意気沈してしまった。



ルンゼを登り詰めると平たい雪面へ。右がラトナチュリ



C2 への渡渉



C2 地球が俺たちの家



氷河の上。岩が大きく歩きづらい



雪があると紫外線が強く 日影もなくて暑い

10月2日 C1 ~ C2

5時半出発。C1からC2は、まず細い沢沿いの崩壊斜面をトラバースし、渡渉をこなして氷河へ上がる。渡渉地点は岩が凍っていたためアイゼンを履く。そして氷河上へでた後、ガレたモレーン上をふたこぶ形の丘を目指して歩く。その後、池を通り過ぎると積雪深が20cm程となる。岩が積み重なった上に雪が積もっており大変歩きづらい。そんなこんなで進むとC2への本格的な登りの手前に差し掛かる。C2となるだろう5500m付近のコルまでの上がり方は2通り考えられた。1つは右側から、稜線を辿って歩いていくやり方。雪崩の危険がなく、斜度もロープを扱わず登れる程度であったがやや遠回りになる。もう1つは左側へ巻きルンゼを登る方法。これは、距離は短い、その先の状況がやや不透明である。偵察の結果、ルンゼは最初を乗り越えれば緩やかになりそうだと分かり、後者のルートに決定。100m弱ルンゼを登ると平たい雪面へでた。そこからスネ程度の雪をラッセルして進むとC2に着いた。C1-C2は4時間弱とかなり順調な歩みだった。C2付近はなだらかなコル状の地形であり、雪崩の危険の少ないような場所にテントを設営した。その後は、高所順応のためのんびりと過ごす。気持ち悪さや頭痛などはないが、ひどく息が切れた。ハーネスなどを着用するだけで一苦勞といった感じで、何をするにも間に休憩が必要。



10月3日 C2 停滞

昼前から 5800m 付近まで、トレース付け兼偵察へ出かけた。基本的には膝程度までの雪をラッセルして歩くのみであったが、かなり息が切れてしんどかった。

10月4日 C2 ~ HC

いよいよアタック。さあどうなるだろうか。4時前 C2 出発。天の川が淡く流れている。星は降るように輝き、月はひととき大きく光っている。前日つけたトレースを黙々と登る。高度に慣れたのだろう、前日に比べると体が随分と軽く感じた。暗い中、やや地形に斜度がつく。どうやら臙げに見える景色から判断すると、岩尾根を登る選択と、谷に降りて岩尾根をトラバースする選択があるようだ。まだ暗く谷の様子が分からないこと、雪崩やクレバスのリスクなどからそのまま岩尾根を登ることに決定した。ここからロープを出す。1P 目は尾高リード。特に難しくはないが、岩がかなり脆い。この辺りで徐々に日が昇り、対岸のラトナチュリが陽に照らされてオレンジに染まる。それが灰色の空に浮かび上がる様は美しかった。心が震えるような景色ってこういうことを言うのだろうか。間違いなく人生で一番美しい景色だった。

続いて 2P 目も尾高リードで細く脆い岩のリッジを進む。かなり不安定な岩が多く、ピトンを打ち込んでも効かないので緊張した。3P 目は井之上リードで引き続きボロい岩尾根。このあたりで完全に明るくなり、岩尾根はまだ続く一方で谷に降りれば普通に歩けそうと言うことが判明した。ここで懸垂をして降りてもよかったのだが、岩尾根の続きに見えるチョックストーンが中々魅力的であったので、もう 1 ピッチ登攀を続けることを決める。

ブンギ南峰を目指して岩尾根を登る。
のちにブンギサウスウエストリッジと名付けた。



朝日に染まるラトナチュリと中沢



このチョックストーン越えは尾高が担当。難度的には赤岳主稜の 1P 目程度だが、6000m の標高で登るとひどく息が切れた。

このピッチを終えた後は、懸垂で谷へ降りる。谷は岩の上に積もった雪をひたすらラッセルで進むといった感じ。ここで芦沢がかなりのパワーを発揮し、頼もしかった。本人曰く、さほど苦しくはないらしい。高所ラッセル兵器の誕生である。コンテで登っていくと、やがて地形は 60-70 度程度の雪壁へと変化した。この辺りは皆かなり疲れていたが、気合で登っていく。やがて、平たい稜線に出た。ここが南峰頂上かと思いきや、現実とは残酷である。そこは、主稜線とは二重山稜のような形となっており、間には深いクレバス帯が横たわっていた。暮れなずむ空とヒマラヤの山々を見ながら、皆呆然と立ち尽くす。行動開始から 13 時間が過ぎていた。

絶望に暮れても仕方ないので、HC 設営後、比較的元気の残っていた、井之上、尾高、中沢でクレバスを突破するルート工作へ向かう。井之上が主導して、迷路のようなクレバス帯の中、FIX ロープを張った。隊長、流石の気合いである。2-3 時間程度粘った末、ようやくクレバスを突破できそうなルートを発見した。

ほうほうの体でテントへ戻り、水を作り、アルファ米を作って就寝。アイゼンやハーネス脱着、果てには水作りまでの一挙手一投足がしんどく、ほとんど皆口を交わさなかった。食欲もなくアルファ米を 40g 食べただけで吐き気がする始末。後に我々は HC を『雪と氷の監獄』と名付けた。



まるで積み木が重なってできたような脆いリッジ



チョックストーン越え



ウエストリッジを登る横道



ピトン3枚の終了点 落ちれない緊張感がある



ウエストリッジからの懸垂下降



ブンギ南峰を目指しひたすらラッセルする。ゴッホみたいな青黒い空



南峰直下の雪壁



この一歩が世界初の一歩



ヒドゥンクレバス（隠れたクレバス）
に備え常に5人でロープを繋ぐ



朝日で山々が桃色に染まる



昨日張った FIX ロープでクレバスを突破する

10月5日 HC ~敗退点~ HC

絶望的な気分で起床。地平線の果てまで桃色に染まった白銀の山々が埋め尽くし、周りはクレバスに囲まれている。マチャプチャレ、アンナプルナ、ラトナチュリ、、、。そんな景色はまさしく神々の住まう峰々という言葉が、ぴったりなほど気高く美しいが、同時にどこまでも冷たく、生の気配を感じなかった。また我々が登っていた西面は一切陽が当たらず、指先を動かし続けなければ凍傷になりそうなほど寒い。そんな中、クレバス帯を越え、ひたすらラッセルをしながらトラバースを続ける。先頭はずっと井之上で、とても辛そうだが、誰もなかなか自発的に交代は申し出ない。みんな限界なのだ。稜線に出る手前で芦沢がラッセルを代わり、なおも進んでいくと下から見て核心と思われた岩が露出しているリッジ付近へ来た。想像していたよりもはるかにスケールがある。山頂までは標高差 300m 程度あり、かなり斜度も急で、しっかりとしたクライミングになりそうだ。陽がようやく当たり多少元気を取り戻す。尾高がリードで登り、最初のピッチはトラバース。岩の上に 20 cm 程度雪がついている感じで気を使った。続いて、簡単な歩きを終えて岩峰へ。岩峰からは空中懸垂をして、コルへと降り立つ地形。この時点ですでに 11 時。皆の疲れ具合などからして、このままアタックを継続することが難しいのは明らかだった。ここで撤退を決め、ポロポロになりながら HC へ帰幕した。

10月6日 HC ~ BC

BC まで一気に下山。最初の雪壁は、3p スタカットで下降後、コンテで行動した。瞬間に、前日苦戦した岩尾根を巻いて通過し C2 へ。C2 でいらぬ荷物を置き、カラス除けのため嚴重にテントなどで包んだ後、下山を再開。池のほりを過ぎてモレーンへ。疲労のせいかわ岩の模様など全てのものが人の顔に見えるという現象に悩まされた。C1 を過ぎ崩壊斜面を抜けて BC のテントが見えた時は心底ホッとしたものの、BC からブンギを見て、あそこにまた戻るのかという少しげんなりした気分になった。



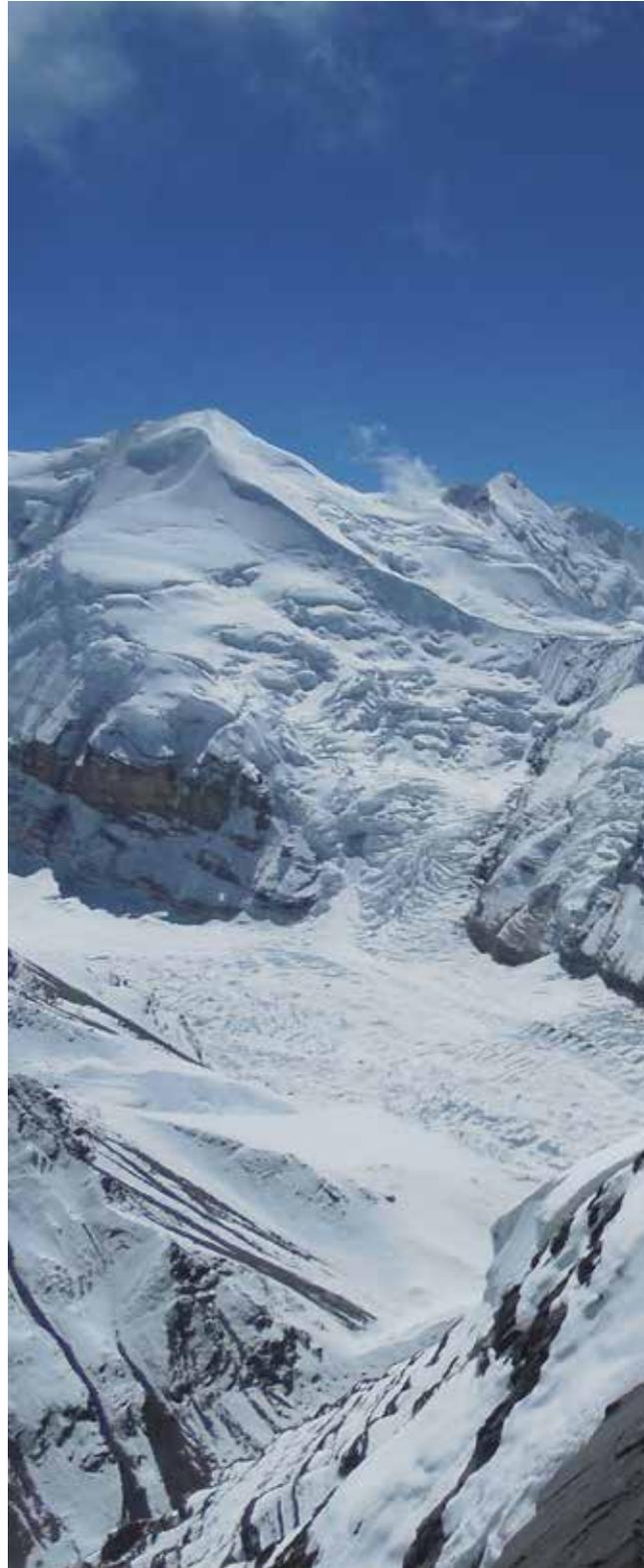
稜線と並行して斜面をトラバースする



稜線上から見たプンギ本峰。想像よりスケールが大きい



死ぬほど辛いのに JK みたいなピースをする井之上

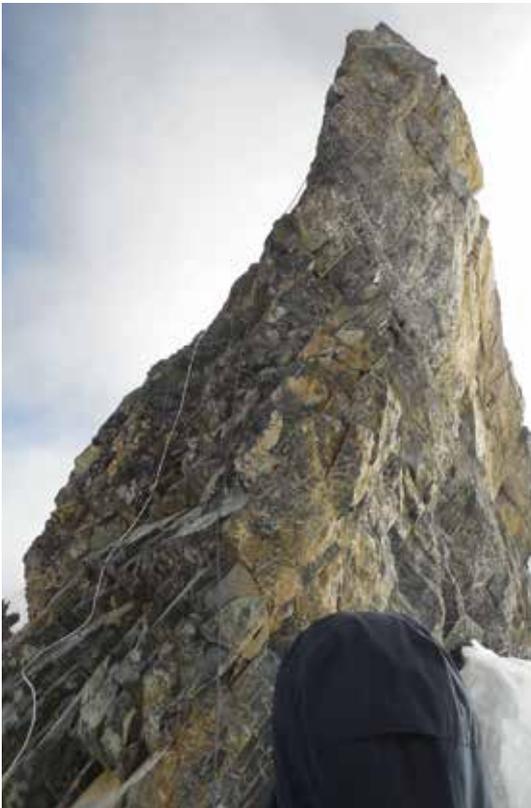




次第に尾根幅は狭まり、ナイフリッジへと姿を変える



遂に尾根上にのった。クレバスが怖いので常にコンテで歩く



後日敗退した岩峰を下から見た図



芦沢と井之上



敗退点からの撤退。プンギ南峰方向を撮った写真





HC から BC に帰る。最初の雪壁は安全を考え懸垂下降で降りた



雪がしまっており、トレースもある為、ロープを出さずに降りられたかもしれない



懸垂終わり。人生で一番疲れている



C2 近くまで降りてきた



C2とC1の間

【 Second Attack 】



クレバスの突破方法も確立し、すぐに通過できた



稜線上のコルの位置に HC を張る

10月10日 BC ~ C2

数日レストを挟み再度アタックへ。もう慣れた谷沿いの崩壊斜面を越え、C1を通過しC2へ。C2では雪が随分溶けており、尖った小石の露出した部分にしかテントを設営できなかった。案の定翌朝エアマットに穴が開いた。またここで、もしジェットボイルの火がつかなくなったらという話をした際、井之上が「人間は3日は水を飲まなくても死なない」と語ったことは後の伏線となる。

10月11日 C2 ~ HC

1stアタックより格段に体が軽い。苦勞した岩尾根を迂回（30分程度！）し、最後の雪壁を駆け上がる。今回は、1stアタックよりも更に先、クレバス帯を越え前回懸垂した地点の手前に HC を設置した。

10月12日 HC ~ Summit ~ HC

いよいよ運命の日。空中懸垂をこなし、ごく小さなピークをいくつか越えて、頂上へ続く長いスノーリッジをスタカットで進んでいく。リードはほとんど井之上と尾高が担当したが、細いスノーリッジを登攀していくのは最高に楽しい。途中何箇所か氷化していたり、雪の付き方が悪い部分もあったが基本的には快適な登攀。左には、対岸にラトナチュリが聳え、右にはヒムルン、そしておそらくまだ誰も足を踏み入れている、いや見られたことさえないかもしれない、隠れた湖や雪の稜線が視界に入る。空は雲ひとつなく、宇宙を思わせる青黒さ。最高だ。

ナイフリッジの登攀を終え、やや傾斜の緩くなった頂上直下の肩で中沢、芦沢、横道にラッセルを代わる。実はここまで来ても、登頂に絶対の自信があるわけではなかった。つまり、南峰の直下であったように、頂上直下にもクレバスがあるのではないかと、ということだ。本当の頂上は頂上50m手前ぐらいに来るまではほとんど見えなかったのである。だから、直下で先頭の中沢が「頂上まで続いている！」と叫んだ時



HC から見たブンギ本峰

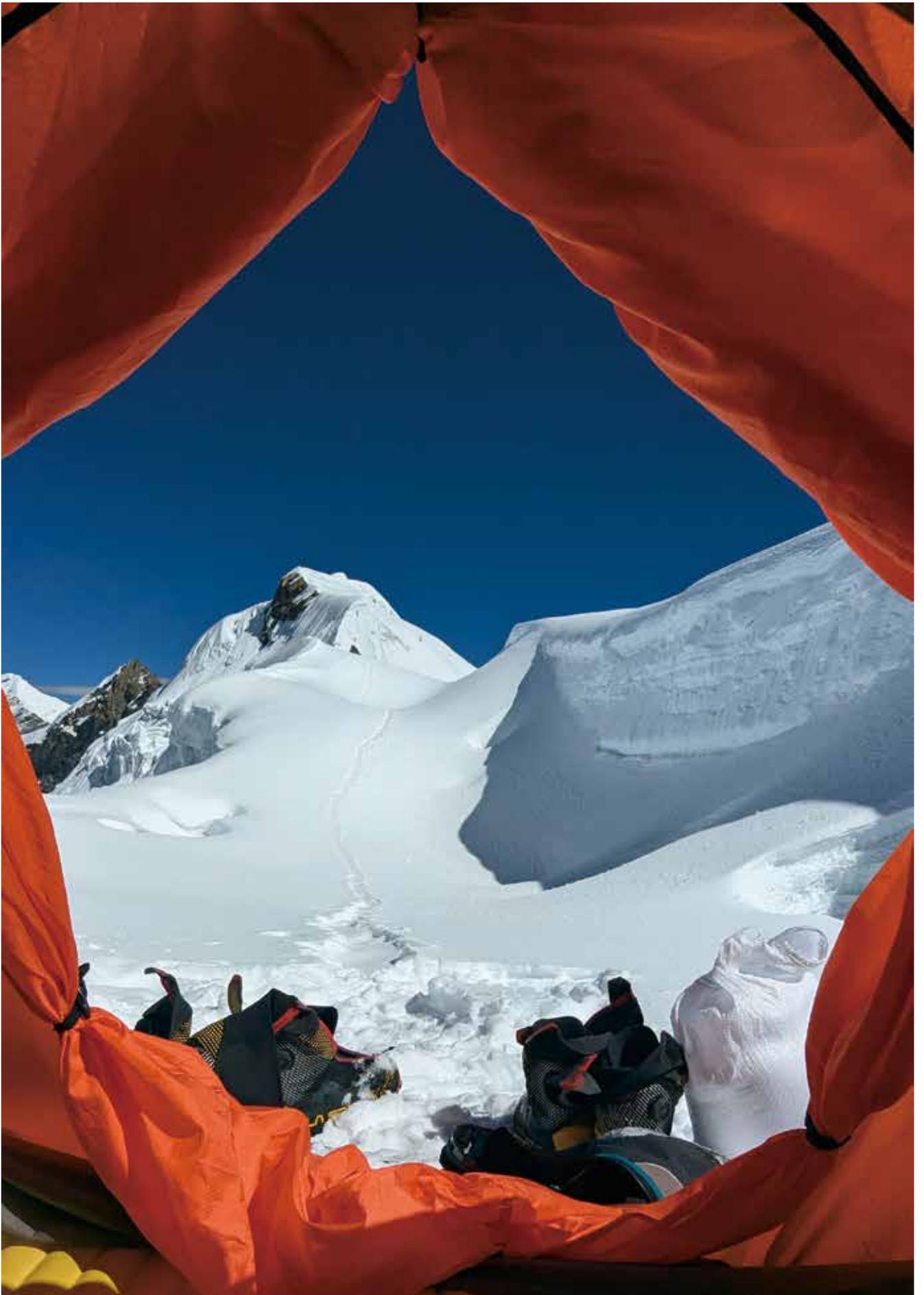


11日は10時にはHC 設置を行い行動を終えた

には本当に嬉しかった。ここでようやく頂上に立てるという確信を得たのである。（ちなみに、もし頂上まで続いていなかったら手前の岩峰を頂上ということにしようか、なんて冗談を言っていた。）そして12:20 プンギ6524m初登頂。みんなで登頂を喜び合う。10分程度写真を撮り、すぐに下山モードに入る。何しろ、せめてC2までは降りなければ、この死の世界では安心などできないのだ。下山もひたすらスタカットで下降。やはり時間はかかるが、焦らずに少しずつ降りてゆく。やがて、空中懸垂の残置ロープを登り返すと、ようやくHCへたどり着いた。ひとまず安心する。ただ、ここで問題が発生した。出発の際テントが潰されたり、飛ばされたりしないようポールを抜いて出発したのだが、その上に積もった雪が日光で溶け、中の荷物が一部濡れていたのだ。寝袋は無事だったものの、1つしかないライターが完全に水没していた。6300mで火が使えない。しばらく格闘しても一向に着火する気配がないため、尾高と横道と芦沢は諦めて先に横になってしまったが、格闘し続けた井之上と中沢の懸命の努力により着火に成功。水を作り、温かい食事でも食べられた。流石、我が隊のリーダーとエースである。

10月11日 HC～ブンギ南峰～HC～BC

翌朝、井之上、中沢、芦沢は南峰の頂上へ。尾高と横道は水作りをした。南峰組が帰ってきた後、HCを出発する。残置物も一切残さないように、クレバスに残置したFIXロープなどを回収。帰りの雪壁もすっかり慣れたもので、あっという間にC2へ。C2の荷物も全て回収して下山していく。C2を去る時は、この距離感でこの山を見るのも最後かと思うと幾分名残り惜しい気持ちがあった。C1でも荷物を全て回収し、一気にBCまで下山する。荷物の重量は25kgぐらいいり流石に苦しかったが、なんとか休みながらBCへ到着。再びジュースで出迎えられた。疲労からか充実感があったものの、登頂の喜びというのはあまりピンと来なかった。ようやく、無事に終わった、、というのが感想だった。





ナイフリッジを越え前回の敗退した懸垂ポイントへ。懸垂後は帰りに備えユマール用に FIX ロープを残す

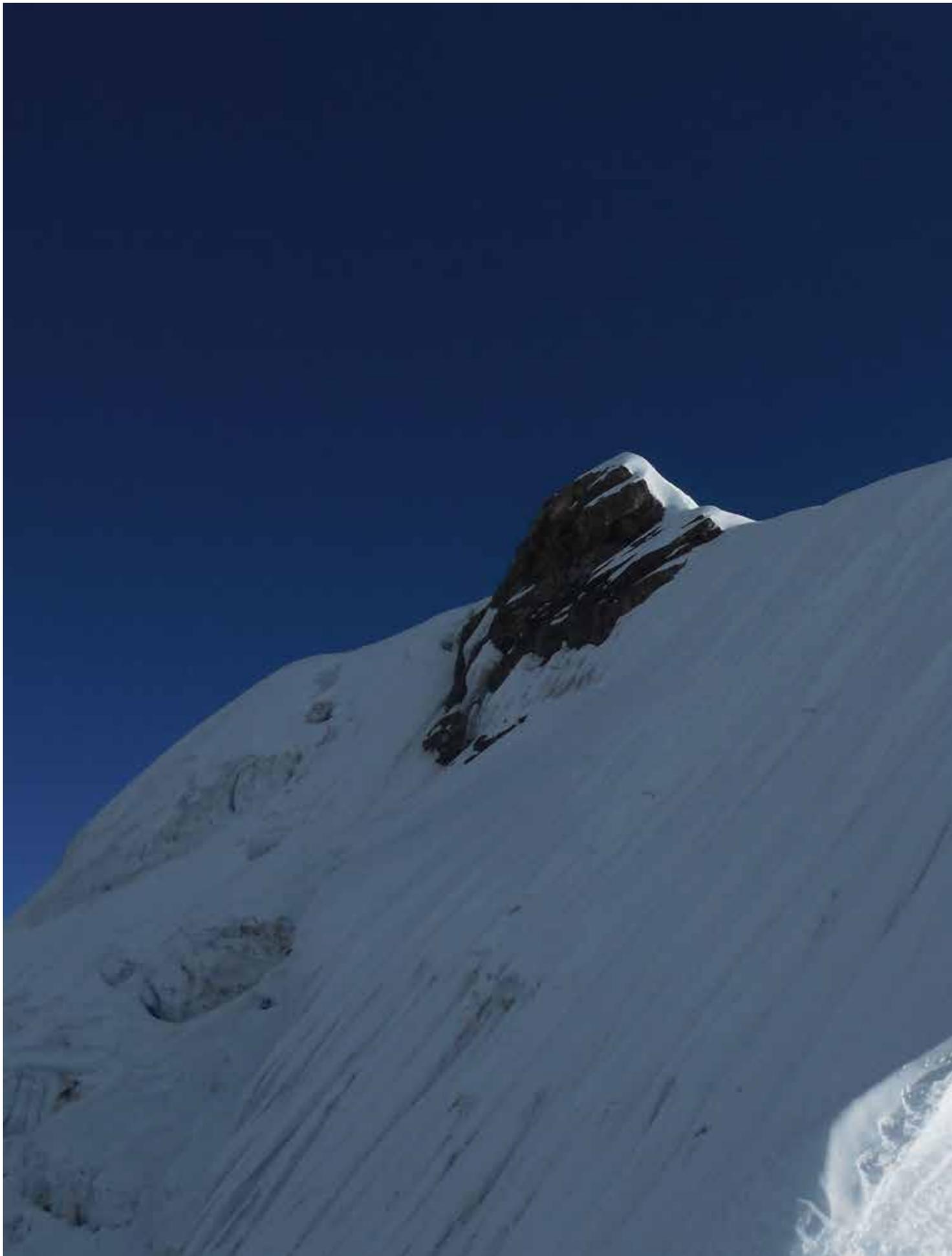


360°見渡す限り壮麗なヒマラヤの峰々。人類が初めて見た景色が広がっている

リードでロープを張った井之上と2ndで登る尾高。井之上 / 尾高が交代でリードを行い、2ndがFIXロープを張る。3rd、4thがFIXを通過中に次のPにロープを張り、4thは5thをセカンドビレイで引き上げるといった同時登攀方式を採用していた。











頂上直下の肩を登る中沢。ここを越えると尾根幅は増した



2024年10月12日12:20 PHUNGI(6524m) 登頂



登攀を担当した2人



高所ラッセルマシン芦沢

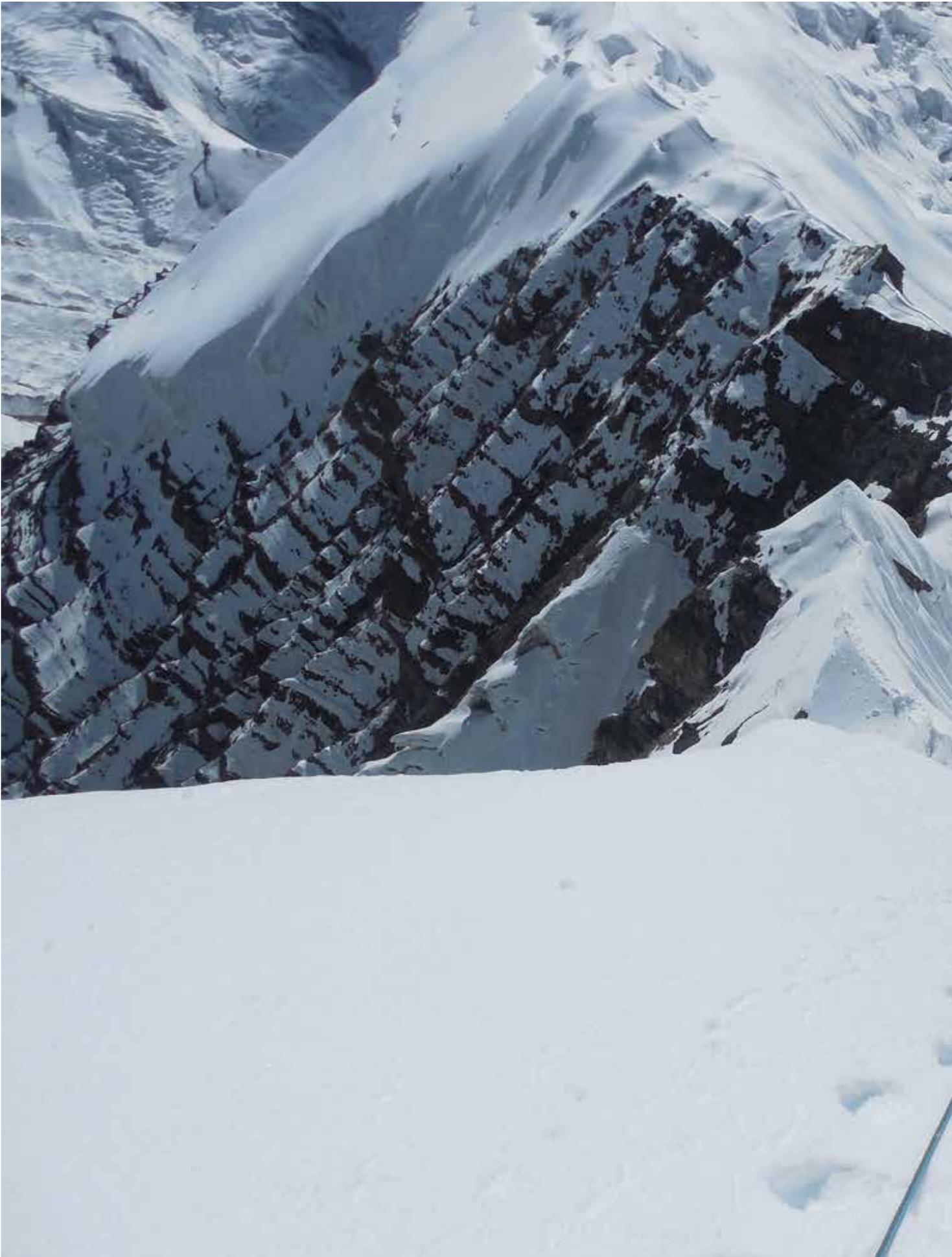


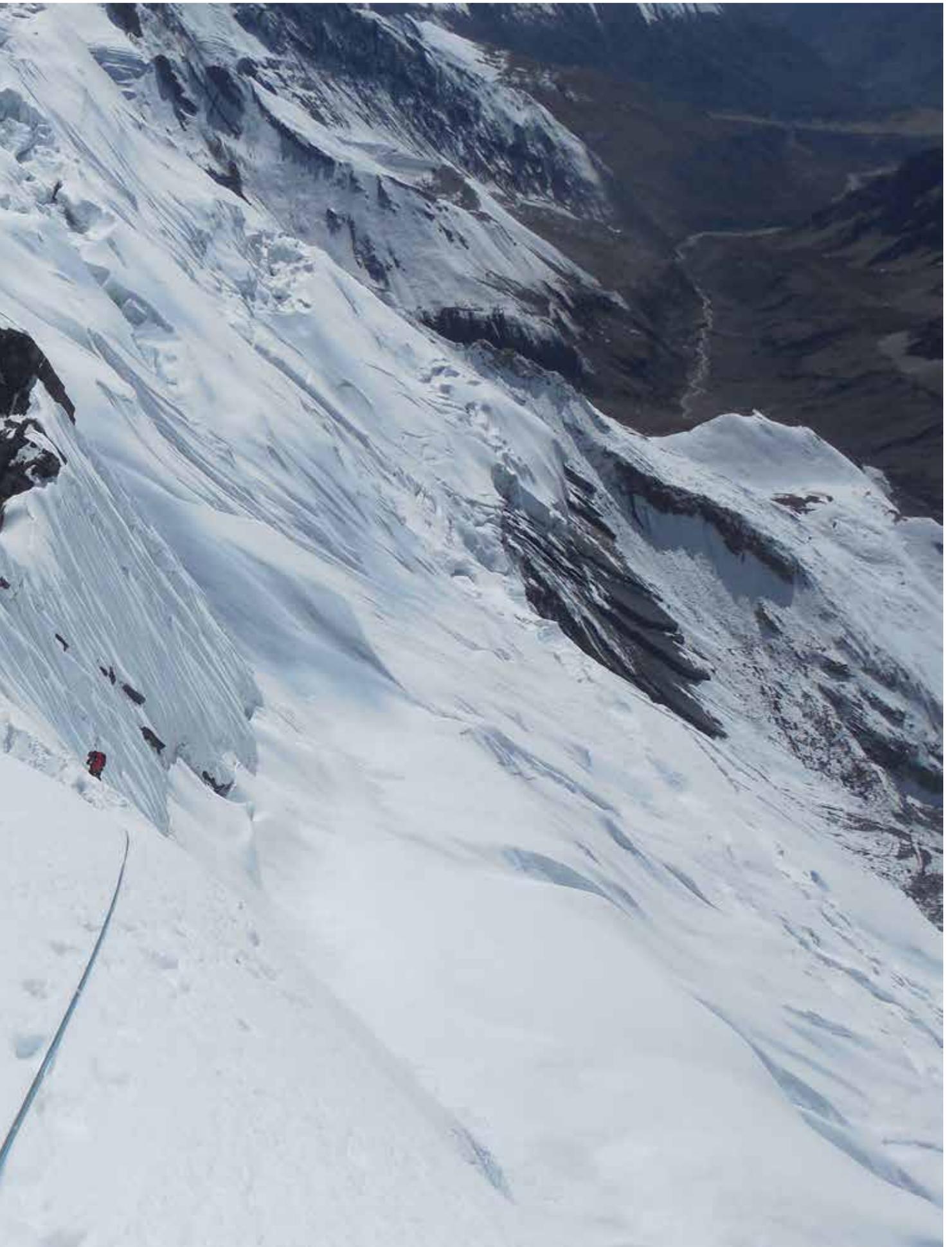
チーム立教の2人





C2 から見た登攀ルート







ブンギサウス山頂



ブンギサウスから見た本峰

-
- | | |
|-----------|-------------------------------------|
| 10月14-16日 | ロバが来るまでBCで待機 |
| 17日 | BC～プーガオン |
| 18日 | プーガオン～メタ/コトの間 |
| 19日 | メタ/コトの間～ベシサハール |
| 20日 | ベシサハール～ポカラ |
| 21日 | ポカラ観光 |
| 22日 | ポカラ観光 報道ステーション取材 |
| 23日 | ポカラ～カトマンズ ワイドスクランブル/めざまし8取材 |
| 24日 | カトマンズ 観光局への登山報告 |
| 25日 | カトマンズ |
| 26日 | カトマンズ アサンチョークへ行く。井之上はダイアゴン横丁と呼んでいた。 |
| 27日 | ジャガティス家でお昼を食べたのち、カトマンズスタジアムへサッカー観戦へ |
| 28日 | ネパール山岳協会と会談 |
| 29日 | カトマンズ AERA 取材 |
| 30日 | ラム家で昼食。サンタの家でバトミントンをする |
| 31日 | 帰国 |

遠征登山のその後



実に俺らっぽい写真

カトマンズに戻ると、ネパール政府観光省登山局にて今回の登山報告を行った。その際、プンギ南峰の登山許可が書面上下りているのか怪しく、少し心配した。結果全く問題なかったが、登山許可を取る際、エージェントに任せきりにせず、細かく書面と地形図を見ながら、自分達の計画と許可範囲が合っているのか確認を行った方が良い。

また、ご縁があり報道ステーションや Abema、めざまし8、ワイドスクランブル、読売新聞、AERA DIGITAL、AAJ など様々なメディアに取材して頂き、目的の一つ「大学山岳部の認知向上」も果たすことが叶った。

帰国後は、日本山岳会年次晩餐会の参加や、Finetrack 直営店での講演会、日本山岳会海外登山報告会では天皇陛下がご臨席するなか発表するなど、自分達の経験を人に伝えた。



BC 最終日。長い間一緒に闘った仲間との集合写真



ポカラの安宿から報道ステーションに生出演



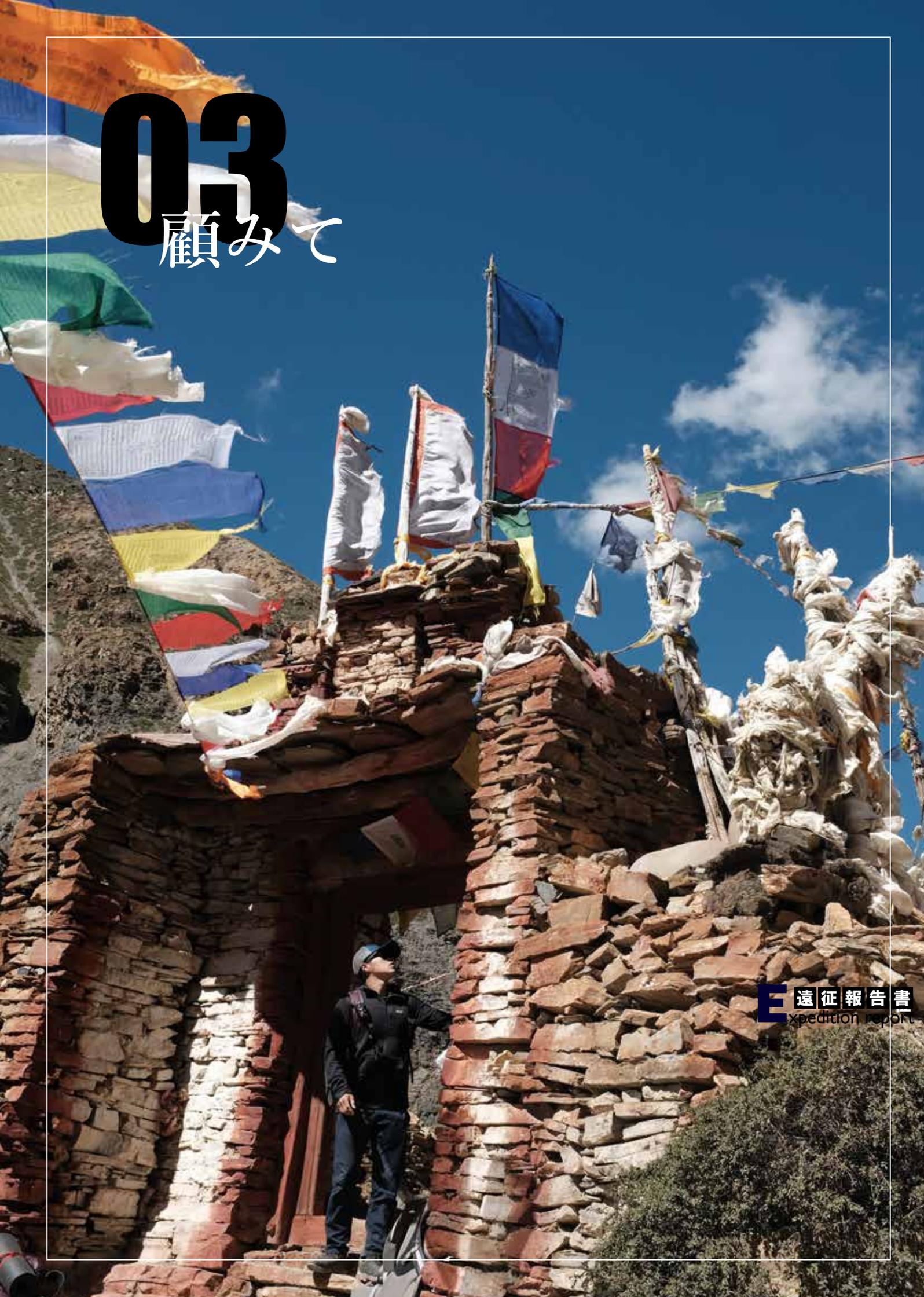
読売新聞の記事



日本山岳会年次晩餐会

03

顧みて



装備について

はじめに

本遠征の装備のポイントは、各大学合同隊であるという利点を活かし、多様な装備を柔軟に調達できた点にある。また、株式会社ケンコー社および株式会社ファイントラックからの装備協賛により、高機能かつ軽量の装備を使用することができた。装備の選定にあたっては、トレーニング登山やミーティングを通じてメンバー間で議論を重ね、未踏峰に適用する最適な装備を熟考することができた。

幕営装備

エージェント会社とうまくすり合わせができておらず、BC用個人テントを余計に持っていくことになってしまった。登山中は、カミナ4を5人でたがい違いに寝て使用。窮屈ではあったが、軽量化を考えると良い選択だった。しかし、大雪でBCに撤退した際、C1にカミナ4を放置し、戻った時にはポールが折れているという失態をしてしまった。付属の補修パーツとゴリラテープで処置を施し、その後の登山では問題なく最後

まで使用することができた。

シュラフは、それぞれアタック用に持参したシュラフのスペックが違ったため、テント内で寝る配置を工夫し配慮した（2名はレンタルの薄いコールマン、1名半シュラ、2名冬季用）。マットは、エアマット×2と短い山と道×2を使用。エアマットを両端に敷き、間に山と道やロープを敷いた。

炊事用具

火器は、ジェットボイルを使用。ガス缶は、会社に手配してもらった冬季用プリムス缶を使用した。ガス使用量は少なく、かなりの量が余った。結局使用したのは5缶いかないくらいだった。

登攀用具

メインロープは、7.1×60mを2本使用。FIXロープは、タメル地区で200m購入し、100mをアタックに持参。クレバス帯と稜線上の岩稜帯で使用した。

プロテクションは、岩場ではハーケン、スノーリッジと下降ではスノーバーが活躍した。

個人装備

ダブルブーツ、ダブルアックス、協賛品のアタックザックとハーネスなど、基本的に全員が同等スペックのものを使用することができた。一点付け加えるとすれば、アタックには無関係なおもちゃを持参する者がいたことをここで記しておく。

その他

ガーミンの通信機器を持ち、衛星通信で天気予報やメッセージのやり取りができた。登録料は高いが、リスク管理に大きく貢献した。

まとめ

本遠征は、登攀の方法やリスクを考慮した上で、徹底した軽量化を図ることができた。それにより、高所での身体的負担を軽減し、スピード感のある登攀につなげることができたと考える。



他がg単位で削る中 A 沢がこっそり持ってきやがった、中大とBOOKOFFのマスコット人形

共同装備	品名	商品名	数量	備考
露営具	BC用テント	カミナドーム2	1	○1st I
	BC用テント	ステラリッジ	1	○1st I
	BC用テント	ゴアライト	1	×
	BC用テント	立教2人テント	1	×
	BC用テント	立教2人テント	1	×
	ABC用テント	V6 + 冬張	1	×
	HC用テント	カミナドーム4 + 冬張	1	◎1st I II III ▲
	ツェルト	ツェルト2ロング (FT)	2	◎1st I II-1 III ●
炊事具	バーナー	ジェットボイルスモア	2	◎1st I II-1 III ●
	BC用置き型バーナー	SOTO	1	×
	ガス缶	現地調達品	20	○
	ガス缶 (アタック用)	現地調達品	5	○1st I II III ●■
	浄水器		1	×
	食料	アルファ米		◎1st I II III ●■
	食料	スープ		◎1st I II III ●■
	食料	飲み物		◎1st I II III ●■
	食料	フリーズドライ		◎1st I II III ●■
食料	うなぎ	20	◎	
登攀具	クライミング用ロープ	Skimmer Eco Dry7.1*60	2	◎ 1st I II III ▲
	FIX用ロープ	現地調達品	200m	◎ 1st I -1 II III ●
	捨て縄	現地調達品		◎
	スノーバー	Mサイズ	10	◎ 1st I II-6 III ▲
	アイススクリュウ	ブルーアイス19cm	2	△ 1st I II III ●
	アイススクリュウ	ペツル17cm	2	△
	アイススクリュウ	ブルーアイス13cm	2	△ 1st I II III ●
	アイススクリュウ	ブルーアイス10cm	2	△ 1st I II-1 III ●
	ハーケン	アングル	6	◎ 1st I -1 III ●■全て
		ブレード	6	◎ 1st I -2 III ●■全て
	スリング	180cm	5	◎ 1st I II III ●
		120cm	7	◎
		60cm	7	◎ 1st I II III ●
	カラビナ	安全環付きピナ	10	◎ 1st I II III ●
		ノーマル	20	◎ 1st I II III ●
	カム	0.3~3 (トーテムカム)	各1	△
	トライカム	トライカム	1set	△■
	マルチフック	ペツル	1	○ 1st I II III ●
雑具	医療パック	医療品表参照	2	◎ 1st I II-1 III ▲
	修理具	ゴリラテープ	2	◎ 1st I
		裁縫道具	1	○ 使用せず
		細引き	10m	○ 使用せず
	スノーソー		1	△ 使用せず
	GPS	ガーミン67i	1	◎ 1st I II III
	ソーラーパネル		2	◎ 高価なやつの方が良い
	トランプ		1	◎
	ゴープロ		2	◎ 1st 2nd I II III
	インスタ360		1	◎ 1st 2nd I II III

品名	数量	備考
ハードシェル上下	1	◎
厚手ベースレイヤー上下	1	◎
フリース	1	◎
化繊保温着	1	◎
ビレイジャケット	1	◎
毛手袋	2	◎
オーバークローブ	1	◎
防寒テムレス	1	◎
VBL用ゴム手袋	40set	◎
厚手靴下	3	◎
ニット帽	1	○
帽子	1	◎
バラクラバ	1	◎
ネックウォーマー	1	◎
サングラス	1	◎
ゴーグル	1	○
高所用登山靴	1	◎ Gサミット、G2
トレッキングシューズ	1	◎
ガッシャ	1	◎
アタックザック	1	◎ ワーソッグ 30l
パイル	2	◎ クォーク
ピッケルリーシュ	1	◎
トレッキングポール	2	◎
アイゼン	1	◎
ビーコン	1	◎
ビーコン予備電池	20	◎ アルカリ
スコップ	1	○ 隊で2本で良い
プローブ	1	○ 隊で2本で良い
時計	1	◎
ナイフ	1	◎
ハーネス	1	◎ コーカスプロ
ヘルメット	1	◎
ルベルソ/HMSピナ	1	◎
プルージックコード	1	◎ スターリン社製
マイクロトラクション	1	◎
シュラフ	2	◎
シュラフカバー	1	◎
個人マット	1	○ 隊で2枚で良い
エアマット	1	○ 隊で2枚で良い
コッヘル	1	△ 使わず

品名	数量	備考
マグカップ	1	○
武器	1	○ スプーンで良い
行動食	適数	◎
アミノバイタル	60	◎
マルチビタミン	60	○
テント内着	1set	◎ 半袖短パン
プラティパス	1	◎
テルモス	1	◎
ヘッドン	1	◎
ヘッドン電池	上記	◎
ライター	1	◎ Big社製
セームタオル	1	◎
モバイルバッテリー	適数	◎ 20000A以上
日焼け止め	3	◎ アネッサ
歯ブラシ	1	◎
カミソリ	1	○
マスク	10	◎
エマージェンシーシート	1	◎
パスポート	1	◎
変圧アダプター	1	○ なくても充電可
充電コード	1	◎
服	2	◎ 現地で買える
本	1-5	○
うがい薬	1	◎
アイマスク、耳栓	1	△ 使わず
テーピング / 絆創膏	1	◎
証明写真	1	◎ SIM契約に必要
サンダル	1	◎

◎ 必須装備	II	C2
○ あっても良い	III	HC
△ なくても良い	- 数	個数
× いない	●	HC デポ
1st 1st アタック	▲	C2 デポ
I C1	■	2nd アタック追加

食料について

はじめに

登山期間は、尾西食品株式会社より協賛で頂いたアルファ米を軸に、フリーズドライの味噌汁やリゾットと合わせ

- ・慣れていて美味しく食べられるもの
- ・軽量なもの
- ・お湯だけで完結するものを準備した。

高所での食事

朝 α 米100g / フリーズドライ / スープ。夜 α 米150g / フリーズドライ / スープとし、 α 米とフリーズドライは小さい耐熱ジップロックに小分けすることで食器も削った。

高度障害の影響で思った以上に食が進まず、100gすら食べられない時もあったので、量はもっと少なくて良かったと思われる。

また、登山日数が長く、後半は食事に飽きがきたため、 α 米やおかずのバリエーションをもっと増やした方が良かった。

味噌汁と一緒にご飯を食べることが多かったが、お米をふやかすことで食べやすく、消化も良くできたのでおすすめである。

行動食について

基本は各自自由なものだったが、全員共通してエナジージェルを持参しており、高所の影響で固形物が摂取しにくい中、流動食で栄養を摂ることができた。ジェルのデメリットは高価であることと、腹持ちが悪く持続性があまりないことだと感じる。個人的に柿の種を持参していたが、食べる気にならず、チョコレートなどの甘いものやグミなどの小さくて食べやすいものの方が摂取しやすいと感じた。一方、中には柿の種梅味とワサビ味を好んで食べている者もいたので個人差は大きい。

また高山病対策で水を多く飲む必要があるが、味がある方が飲みやすい。甘いコーヒースティック、お茶パックなど色々持って行くと良い。個人的にはレモネードの粉とコーラの素がホット / アイスどちらにも使えて良かった。

BCでの食事

コックさんが常に食事を作ってくれたのだが、想像をはるかに超える味で、BCでの生活をとても快適なものにしてくれた。基本は日本食を提供

していただき、登山前は消化の良いものをリクエストするなど、コックさんと細かくコミュニケーションをとりながら食事をとることができた。

1日だけ夕食後、中沢が嘔吐し、他のメンバーもお腹を壊したことがあった。その日のメニューはコロッケであり、今思うとねっとりした食感や油が怪しかったと思われる。以上の点から、注意すべきことは、高所であることを留意して食事をすることである。特に、美味しくてついつい食べ過ぎてしまうため、自制して食事をするのと、怪しい食事があれば、遠慮せず申し出ることが大切である。

まとめ

今回の遠征では、高度障害による食欲不振がほとんどのメンバーに見られたため、高所でも食べやすいものを十分に研究して準備する重要性を痛感する結果となった。そして、費用がかかることを承知の上で、効率よく力になるような食事を目指していく必要があると感じた。

医療について

はじめに

今回は初めての遠征という事で2つの点に注意を払っていた。

高山病

高山病 (Acute Mountain Sickness) とは、高所において低酸素環境によって起こる身体不調の総称である。症状としては、軽度なものから頭痛、吐き気、食欲不振、倦怠感、睡眠障害がある。また、高地脳浮腫 (HACE) や高地肺水腫 (HAPE) といった重篤な合併症も存在し、すぐに下降しなければ死に至る場合もある。

予防としては、高度を徐々に上げ、体を環境に慣れさせながら標高を稼ぐこと。水を大量に飲み、血液循環を円滑にすること。口すぼめ呼吸を行うことが挙げられる。

また、C2以降では体調を見つつダイアモックスを服用した。効果は絶大で、飲むと症状が改善した。一方、副作用としてかなりの利尿作用がある為、我々は半錠にしたりと、その日の獲得標高や行程を考慮して服用量を調整していた。血中酸素濃度も重要であり、

パルスオキシメーターを使用し、毎晩測っていた。一般論で言えば、90%を切ると危険とされているが、持論を言うと、例え多少数値が低くても、当人に大した症状がなく元氣なら、驚嘆な数値じゃなければ問題ないように思う。数値には個人差が存在し、数%の上がり下がりで一喜一憂する必要性はない。当人の数値の減少幅が極端に大きくないかを考慮すると良いと思う。

病気

A/B型肝炎、破傷風、日本脳炎、(狂犬病)の予防接種を打つことを義務化した。予防接種には同時接種ができないものも存在するので、計画的な接種を心掛けたい。

また、不用意に犬に近づかないことや、キャラバン中は小まめな手洗いうがいとマスクの着用。生野菜や氷の入った飲料を避けるなど、不要な体調不良を起こさないよう注意した。

薬名	効果	数量
アンプロキシソール	痰を出やすくする。乾いた咳。痰が出すぎて辛かったら×	60
PL 配合顆粒	風邪薬。ちょっとした風邪。アンプロキシソールと併用可	60
ロキソニン錠	痛み止め。熱も下がるが、判断がしづらい為、無理に下げない	60
レバミピド錠	ロキソニンで胃が荒れるので胃薬。強さは普通くらい	60
ビオフェルミン配合散	整腸剤。下痢に使用。	60
つくし A・M 配合散	太田胃酸と同じ。食欲不振位の胃の不調時。強さは弱	60
レボフロキサシン錠	抗生剤。1日1回。熱の時は×。3回/1日の下痢や細菌、深い傷に◎	20
バイアスピリン錠	痛み止め。血をサラサラにする。心筋梗塞。1日2回	20
ニフェジピン L 錠	息苦しくて歩けない。胸がゴボゴボ音する→飲んで下山	20
ファモチジン OD 錠	強い胃薬。みぞおち、肋骨の下に痛みを感じたら	40
フェキソフェナジン塩酸塩錠	アレルギー薬。虫刺され	40
ダイアモックス錠	急性高山病。獲得標高 1000m 以上に朝晩飲む	84
ヒアルロン酸 Na 点眼液	涙と同じ。異物除去に使用	2
AZ 点眼液	目の炎症、充血。雪目×	2
リンデロン点眼液	雪目	2
デルモゾール G 軟膏	虫刺され、かゆみ	4
ゲンタマイシン硫酸塩軟膏	抗生剤。切り傷	2
パルスオキシメーター	SpO2 を測定	1
外傷用救急品	絆創膏、包帯 etc	
うがい薬	キャラバンで使用	5

エージェント / 保険について

エージェント会社

ネパール遠征において、登山手続きや特定地域入域許可取得、BC 設置などガイド・スタッフの手配は大切である。2023 年、BC までのガイド同伴が義務になった点からも、トレッキング会社との契約は避けられない。

山によってその価格は変わるが、予算の大半はこのエージェントとの契約料金となる。

大半のトレッキング会社は、依頼料が決まっておらず、高額な金額を提示された場合は、予算に応じた値引き交渉をする必要がある。全ての行程を至れり尽くせりで行えるパッケージプランを最初に提示されることが多いが、少々割高なことが多い。そのため、トレッキング中の宿泊費や食費をすべて自分たちで負担する形にすれば、大幅な減額が見込めるため、そのように交渉するのが良いだろう。

ただ交渉において、過度な値引きは禁物である。トレッキング会社との良好な関係も登頂成功率に関わってくるのは言うまでもない。以下に交渉テクニックをいくつか抜粋して紹介する。

①パッケージプランでなく、カトマンズやトレッキング中に発生する宿泊費、食費を自己負担にしたいと伝える。

②先に強気な値段を提示する。(交渉では、序盤に提示した双方の金額の中間で落ち着くことが多い)

③同時並行で進めている他社の見積もりを出し、より安い金額を求める。

④他の遠征隊を紹介する。

⑤トレッキング費用に出せる金額を伝える(うまくいかない場合の最後の一押し)。

今回使用した『Janakchuli Treks』は青学が長年利用しており、本遠征も素晴らしい仕事ぶりだった。日本語が話せ、値段も高くないため、強くおすすめできる。

保険

少なからずリスクの大きい海外登山では、現地での救助費用や治療費のための保険に加入することを強く勧める。

海外登山に対応した保険は多くなく、我々は複数社に連絡した上で、日山協山岳共済の既存プランに加入した。

保険料は加入期間と、山の標高によって決まり、加入期間は出国日から帰国日までで、2ヶ月以上は1ヵ月単位となる。標高は6000m以上か未満で変わる。

我々は、6000m以上2ヶ月で1人あたり¥168,910だった。

保険加入には時間がかかるので、計画概要が決まったら保険会社に早めに連絡を取ると良い。

Janakchuli Treks Pvt.Ltd

P.O.Box: 10842,Kathmandu,Nepal

Contact:+977-1-4820391,

+977 9843546546

Email:janakchulitreks@gmail.com

Web:www.janakchulitreks.com

会計報告

見えない費用

「見えない費用」として、装備の新調（ダブルブーツやアックスなど）やトレーニング合宿の経費があり、平均約40万円はかかっている。そのため、実質的な自己負担はおよそ90万円になると見積もっておくと良い。

遠征が決まったら

まず予算の策定を行う。右記支出の枠を参考にネットで相場感を調べながら予算を組む。次に「人格なき社団」として遠征隊口座を作成する。遠征隊の名前がついた共同口座があると、寄付を募る際とても便利だが、①団体の規約②団体の活動実績が分かる資料③団体の総会議事録④代表者の本人確認書類⑤来店者の本人確認書類を用意する必要がある上、条件が厳しく、時間もかかるため早めの申し込みが求められる。本遠征隊は口座作成に失敗し、隊長の新規作成した個人口座で資金のやりくりを行った。

飛行機の予約

飛行機を早期に予約するのも節約には重要である。今回は

おすすめのキャセイパシフィック航空とシンガポール航空を紹介したい。

キャセイパシフィック航空は香港の航空会社で、香港経由でカトマンズに行く。優良航空会社でサービスも良い。

シンガポール航空は毎年の航空会社格付において上位に位置する航空会社であるが、学割制度を利用することで、格安で乗ることができる。学割制度は航空券2割引、預け荷物40kgまで、1回まで片道の航空券変更手数料無料があり、これを利用したことで、我々は往復10万円で航空券を手に入れた。

想定外の出費

関税と食費があった。

事前にネパールへ国際郵便（EMS）で送った装備に18万円の関税がかかってしまった。理由として、内容物記載事項でトラブルに巻き込まれまいと新品価格の値段（30万円程）を記載したからだと推測する。

外貨への両替も円安の煽りを受け、手数料を入れると、100Npr=125円だった。クレジットのキャッシングも両替

屋と変わらない手数料だったため、常に為替を見ながら円の価値が上がるのをメンバー全員で祈っていた。結局登山が終わり、カトマンズに戻ってくると円安は更に悪化しており、余ったα米を食べて生活するなど節約しながら2週間を過ごした。

キャラバン中のダルバート1食の価格は1000NPR(1200円)と想像の2倍の値段だった。想定外の出費から、途中からお湯は買わずに自分達で沸かすなど、泊める側からするととても非経済的な行為を行っていた。キャラバン中は現金しか使えないので、多めに引き出しておくことで安心できる。

一方、宿泊費は想定通り一泊ツインルームで1200nprと非常にリーズナブルであった。聞く話によると、外国人登山客の多い地域は、値段がより高く設定されているらしい。

まとめ

行く山域によって価格設定は大きく異なるので、予算にはある程度の幅を持たせることをおすすめする。

●収入 / 支出

【収入】

単位(円)

	200,000
	1,880,569
	1,543,000
	200,000
自己負担金	2,048,260
合計	5,871,829

【支出】

単位(円) 1npr=0.8円

国内費用総額	1,653,309	国外費用総額	4,218,517	備考
航空券	496,000	エージェンツ費	3,160,000	\$20000(1\$=158円)
保険費	844,550	下界宿泊費	80,327	行き60327円、帰り20000円
ビザ	75,000	下界食費	125,000	20日×1000npr×5人
通信費	19,798	ロッジ宿泊費	81,250	行き10泊 帰り3泊×1000npr
装備購入費	148,461	ロッジ食費	162,500	2000npr×13日×5人
装備輸送費	69,500	追加装備購入費	74,375	FIXロープやガス缶
		食料費	250,000	BC食料費用
		SIM費用	6,000	NAMASTE 20GB 28日
		エージェンツチップ	100,000	ガイド3万、コック3万、ジェタ2万、他5000npr
		関税	179,065	EMSにかかった関税
合計		合計	5,871,829	



空白の時を超えて

井之上巧磨

「フォーー!!」叫ぶと酸素がなくなり頭が痛い。ただこれが叫ばずにいられるだろうか。私達は今、世界で初めてこの山の頂に立ったのだ。生きてる事が嬉しくて、山頂にこれた事が嬉しくて、仲間と一緒にるのが嬉しくて、4年間の夢が叶ったのが嬉しい。嬉しくて嬉しくてしょうがない。誰に、何に感謝していいのか分からないが、とにかく高揚感や多幸感、幸福感がひしひしと体中に湧き上がり、どうしていいかも分からずまた叫んだ。すると周りの仲間も応えるように叫ぶ。ああ山を始めて良かった。今までの辛いこと。この遠征もそうだが、4年間。未踏峰の為に捧げ、努力してきた辛いことや苦しい事が昇華され、今この時のためにあれはあったのだ。私のやってきたこと、歩んできた道は間違いじゃなかったと心の底から思った。」『遠征日記 10月12日より』

今回、山や仲間、運にも恵まれ世界初登頂に成功し、縁もあって様々なメディアより取材をして頂いた。そこで必ず問われる質問の一つが「今回の登山にはどういった価値があるのか?」というものだった。この質問をされた時、大体は「複数大学で構成された学生のみが、情報のない山に行き初登頂した事です」と回答したが、本当の意見は違う。

あれは、ネパールのポカラに滞在していた際、報道ステーションの生中継に出演した時だった。アタックより緊張したんじゃないかと思うような中継を終え、達成感を得た我々は全員

で夜の街へビールを飲みに行き出した。SNSを見るとそれなりに世間にも評価されており、山岳部の認知向上を目的の一つにしていたこともあって、しばらく大いに沸き立った。しかし、その後皆で話したのは「本当に大切なのは他者からの評価ではない」ということである。

私はこの4年間まさに青春を山に賭けてきた。勉強もそこそこに、常に山のことを考えて生活し、しまいには休学までして大学生活も5年目に突入している。そして、心から信頼できる仲間と遠征に行き、ヒマラヤを舞台に死力を尽くして、強大な自然と戦った。

結果として世界初登頂に成功し、それに一定の評価を得ることもできた。

ではこれが全く逆の結果だったらどうだろう?

遠征に行ったけど登頂できなかったら?

登頂したけど誰の評価も得られなかったら?

私が過ごした4年間。遠征に行った2ヶ月間は無意味で、無価値なものなのだろうか?

私は全くそうは思わない。ヒマラヤの未踏峰を目指し、部活の仲間と血と汗を流した日々も、遠征隊で過ごしたネパールでの時間も、私には代えがたい価値あるものであり、例えば世界中の人がそれを否定しようと、その価値が揺らぐ事はない。それは未踏峰に賭け、努力してきた時間に自信があり、例えば失敗しても、これ以上ない仲間と自分のできる最大限の事を行えたという自負があるからである。

今回の登山の価値。それはこの4年間で全力で生き、悩み、迷い、自分の血を流して考

えたことで、自分自身でこれは価値のある時間だったと結論づけられたことにあると思う。

登山をしているとなぜ山に登るのかとよく聞かれる。正直未だ私にも分からない。登山は内容の9割が辛く、この4年間も沢山の苦難があった。山で心身共に追い込まれることはもちろん、クリスマスや成人式。周りの人が楽しそうに生活するなか、好きとは言え雪山に行き、恐怖を感じながら雪と氷にまみれ苦しんでいると、「俺は大学生にもなって何をやっているのだろう？」とどこか虚しさを感じた。

でも、9割は辛い登山だが、ほんの1割。時々「ああ。この時の為に俺は山をやってきたんだ」「この時の為に生きてきたんだ」そう心から思えるような喜びと幸せを感じるものがあつた。それが9割の辛さや苦しみをひっくり返し、また私を山に向かわせるのだった。

今回の遠征もそうだ。宇宙を感じるような青黒い空と、見渡す限りどこまでも続く白銀の峰々。空の底と山が溶け合うあの場所で、私は仲間と人生最大の喜びと、生の実感を得ることができた。冷たく無機質で、それでいて極めて美しい自然だが、それは決して苦しみだけの世界ではない。私たちはその過程での苦しみ故に、生きている事を強烈に実感でき、そうした痛みを進んで引き受け、苦しみを乗り越えることで、生きることの喜びと充実を感じることができるのである。

そして残念なことに、その喜びは登頂の瞬間を最大として少しずつ風化し、刻一刻とその

ディテールを失っている。どんなに写真や動画を撮ろうと、日記を書こうと、あの時、あの瞬間の感情を保存することはできないようだ。その記憶の儂さ故に、現在の時間というのはこの上なく価値あるものであり、過去にすぎるのではなく、『今』という時を全力で生き、喜びを更新しなくてはならないのである。

高校時代、柔道部の師範に言われた。「人生は困難の連続。それを乗り越えチャンスに変える。そしてモノにする。それは大変な事だけど、それが生きるということです。」今なら師範の言っていた事が分かる気がする。全力で生きること。己を越える難題に挑戦すること。それらはとても辛く苦しみを伴うけれど、通して考えれば凄く楽しいものだと思えたことが、この4年間で得た教訓である。

アルピニズムは、絵画や音楽と同じ自己表現の一つだと思う。技術と精神力、自然との調和と仲間との信頼。そして常に伴う死のリスク。それらが重なりあい、初めて足跡が山に刻まれ、ルートになる。その営みはクライマーの人生の軌跡から切り離されることはなく、ルートは必ずその人の独自性と創造性を宿す。そして例え登った者が去ろうと、再登者は時を超えて、その思いを共有し、追体験できるのだ。私に言わせれば、これにロマンを感じない方がどうかしてる。この報告書を通じて、多くの人とロマンを共有し、未来ある後進の道標となれば幸いである。

ネパールで得たもの

尾高涼哉

遠征が終わってしばらく時間が経った。ネパールでの記憶は、自分にとってはどちらかというと「過去」に分類されるようなものとなった。登頂後にBCで残したメモには次のような一節がある。

「不思議にも登頂時の喜びはそれほどでは無いなぜ？ファーストアタックの方がずっと苦しかったから？

結局僕は何を収穫しどう変わったのだろうか？それが一番大事に違いない色々語りたい事はある気がするけれども、今は上手く言葉にならず。ただ、新鮮さが薄れてしまうのも怖い」

僕は一体あの経験から何を得て、どう変わったのだろうか？

思えば、山登りに出会ってから山一筋の生活を送ってきて、それに全てを捧げるのが自分のありたい、あるべき姿だと考え続けてきた。過去のクライマー達の伝記を読み、その自由と苦悩、孤高に心から憧れた。自分もそうありたい、多くを失い、確かな何かを得る、そんな人生を走り抜けたと思って山に向き合った。

だけど、やはり、実際の山は辛いことも多い。というか、実際の山はやっぱり怖いこともあるし、しんどいことの方が多い。冬山で半分凍った寝袋に包まれながら、なんでこんなことをしているんだろう？と自問自答するのも毎回の

ことだった。

そんな時はいつもそうした、困難、苦痛を愛することができない自分に少し失望した。それは、本当に心の底から山に登るという行為が好きなのか？という疑問を生じさせ、いつしか、その問いにはっきりと答えられなくなった。いくつか、「理想の自分」に近づくのに無理をしていた部分はあったのだろうか？この問いに向き合うたびに何となく、居心地が悪く逃げ出したいような気分になる。

だけど、やっぱり、自分は山に登る行為に何らかの価値を見出しているから山に登り続けているのだけれど、その価値とは何か、自分は山に登ることで何を受け取っているのだろうか。

正直、この答えにそんなにはっきりとした答えを出せているわけではない。

だけど、最近の自分なりの思いをまとめてみる。

行動記録でも触れたが、6000mから眺めるヒマラヤの山々は、特に日の出前は壮麗で、間違いなく自分が人生でこれまで見た中で一番美しい景観だった。確かにそこはとても残酷なほど美しく冷たく静かで、息をするだけで苦しくて今にも吐きそうだったが、決して死の世界などではなかった。

死の世界はきつともっと無味乾燥で寒くもないんじゃないかな？

私たちは、確かにそこに立ってゼエゼエ言いながらも息をしていたし、これまで見たことな

いような景色に鼻の奥がツンとなるほど感動していた。そして、そこには仲間がいたし、私たちはむしろこれ以上ないぐらいに生きていたと思う。

また、登頂を終えて BC に帰ってきた翌朝、ダウンを着込みテントで砂糖たっぷりの紅茶を淹れていると、ふと丘の向こうから太陽が登ってきて、朝日が差し込んでくる。それは周囲の空気を溶かし、草原の草花を目覚めさせ、皆に朝を優しく告げる。

ああ、生きてるって次の朝が来るってことなんだなって実感できた。そして、その時初めて登頂できた、この旅は終わったのだ、という実感が押し寄せてきた。

当たり前なことだけど、生きていれば毎日太陽は昇ってくる。自分たちが「非日常」の世界にいても、「日常」の世界は変わりなく回っている。きっと私がネパールにいる間にも、日本の実家では、父がコーヒーを淹れて毎朝同じように新聞をめくることだろう。

また自分のいないところでも、時間は当然進んでいて、ちょっとずつ世界は変わっていく。きっと私が BC で電波から隔絶されている間にも、世界のどこかで何かニュースになるような出来事が起こって、誰かが喜び、誰かが悲しんでいるんだろう。

そんな当然のことが、これまで自分には心の底からはどことなく信じられなかったのだ。

だけど、アタックを終えて BC で朝日に照らされた時、そして日本に帰国して一番最初に実

家に帰った時、ようやく腑に落ちた気がする。

もちろん、これまでの山登りや遠征を通じて、もっと上手くやれたらうことは沢山あるし、後悔だってたくさんある。だけど、自分なりに精一杯、懸命にやったとは言い切れるし、今の自分からはそんな不器用な選択などもとても愛おしく感じられる。

全て形あるものはいつか崩れ、元の形を保てなくなる。ただ、そんな変化って必ずしも悪いものじゃないと思うんだ。思い出は、少しずつ朧げになっていくけど、その輝きはずっと変わらない、いやむしろ、時が経つとより輝いて見える。

そんな思い出は、思い出すだけで胸が熱くなるし、自分に少しだけ誇りと自信を与えて、前に進む勇気をくれる。そんな思い出を積み重ねていきたいと素直に思う。

今回は、多くの方々のご支援のおかげで最高の山登りができました。本当にありがとうございました。自分なりに、今回いただいたご恩を如何に還元できるか、後輩たちに繋げていけるかを考えて今後も活動していきます。

そして、まだ見たことのないような景色を求めて、一歩ずつ自分なりに進んでいけたらと思います。

ダルバート、おかわり！

中沢将大

ネパールに来るのは1年半ぶりだ。真夜中の空港に降り立ち、迎えにきてくれたジャナクチュリトレックの皆さんと車でホテルまで向かう。前回訪れた時のような初々しい興奮はないものの、ようやくネパールに戻って来ることができたことへの嬉しさが込み上げる。カトマンズには見慣れた街並みが広がっているが、よく見ると新しい建物やお店、建設途中の高層ビルが目立つ。この短い間にも、ネパールの街がみるみるうちに生まれ変わっている様子が伝わってきた。そんな変わりゆく街の姿を眺めながら、ふと自分自身のことを思い返す。すでにネパールの地を踏んでいることを不思議に思えるほど、遠征の計画を立ててから出発までの時間は、自分にとって本当にあつという間だった。しかし、その体感的な時間の短さとは裏腹に、この1年半は非常に濃密で、特別な時間だったようにも感じている。何よりも、未踏峰に登れる自信を強く持っている今の自分がいること。それこそが意味のある時間を過ごしてきたことを証明しているように思えた。

2023年3月に行われた立教大学山岳部のヒマラヤ遠征。標高6000mにも満たない山への挑戦だったが、悪天候などの外的要因に加え、自分自身の力不足もあり、結果は敗退に終わってしまった。自分の至らなさを痛感すると同時に、遠征前に多くの支援をいただいたにも関わらず、何ひとつ成果を残せなかったことが屈辱的で悔しかった。このまま大学を

卒業するわけにはいかない。なんとしてでも自分が納得できる登山を卒業までにしたいと強く思った。そのためには覚悟を決めて、山への向き合い方を改め、部活外の場所にも視野を広げながら、山登りに真剣に向き合っていこうと決意した。

帰国後、すぐに外部の登山組織を模索し、社会人チームに顔を出したこともあった。しかし、社会人との山行の日程調整が難しく、今後どう活動していくか悩んでいたところ、横道から学生部で遠征があるという話が舞い込んできた。正直、それまで学生部に顔を出したことがなく、他大学とのつながりはほとんどなかった。だが話を聞いてみると、学生だけでヒマラヤの未踏峰を目指すという。これは、学生である今だからこそ挑戦できる機会だと感じ、大きな価値があると思った。また、そんな計画を立ち上げるような、山に情熱を持っている同い年の仲間がいることに興奮して、嬉しかったことが自身の入隊を決定づけたものになった。誘ってくれた横道、そして受け入れてくれたメンバーには感謝の気持ちでいっぱいだ。

その後、それほど迷うことなく入隊を決断した。「未踏峰」というロマンのある目標ということもあり、最初のうちはイメージがあまり湧かず、どこかピンと来ていない自分もいた。しかし、メンバーと共に山行を重ねるうちに、少しずつ未踏峰へ挑戦する実感を得られるようになった。遠征までの準備期間に行った数々の

トレーニング山行は、大きな刺激を自分に与えてくれた。特に冬シーズンは、毎週のようにヒリヒリする登山計画が連続し、本当に濃密な時間を過ごすことができた。自分としては、厳冬期の北鎌尾根を目標に山に通い続け、それまで冬季アルパインの経験がなかったにも関わらず、仲間たちが連れていってくれたおかげで、自分の実力以上の経験ができた。その目標としていた北鎌尾根は天候が悪く中止となり、その後予定していた劔岳周辺の山行も、ゲートまであと少しのカーブで車が壁に正面衝突して、計画は中止に。仕方なく、小旅行をしてから渋々帰ることもあった。何かとすんなりとうまくいかないことも多かったが、それでも思い詰めずに少し楽観的になれることは私たちの特徴かもしれない。とはいえ、やるべきことを着実にこなしながら、仲間たちと長い時間を共に山で過ごした日々は、自己の成長を促し、チームとしての結束を深める大切な時間だったと感じている。

いざ本番の遠征も、すんなりとうまく行くわけではなかった。ファーストアタックでは敗退を喫し、他にも細かなトラブルが続いた。高山病は想像以上に辛く、アタック敗退後には登山への意欲が薄れるほど憔悴していた。それでも、仲間とこれまでやってきたことや準備にかけた時間を思い返すことで、自信を取り戻すことができた。そして何よりも、ファーストアタックの時に死に物狂いで前を歩いていた仲間の背中が心に焼きつき、自分も今できる

最大限のことをしようと奮い立たせられた。それが、再びアタックに向かう大きな原動力となった。セカンドアタックでは順応も進み、比較的スムーズに行動できたが、南峰と北峰を結ぶ尾根は想像していた通り長く、楽ではなかった。やっと山頂らしきものが見え始めた時から山頂にかけては、一步一步の歩みはゆっくりだったが、心臓の動きは激しく、次第に興奮が高まっていくのを感じた。そして、先頭を行く横道が山頂に到達し、歩みを止めたその瞬間、全てが報われたような気持ちになった。誰一人欠けることなく、5人全員で同時に山頂を踏むことができたことは、これ以上ない結果だった。素晴らしい仲間と素晴らしい山に情熱を注いだこの経験は、生涯忘れることができない大きな宝物となった。

失敗や後悔したことは多くあったが、それが全て今の自分に繋がっていると考えると、無駄なことは何一つなかったと思える。この遠征で得た自信を胸に、これからワクワクするような人生を送ることができるよう挑戦を続けていきたい。また、この挑戦を応援し、送り出してくださった多くの方々への感謝を決して忘れず、これからの山岳部員に向けて恩を送っていきたいと思う。そして私たちと同じように、学生が仲間と集い、海外の山に挑戦をしてくれたらとても嬉しく思う。

眩しき遠征の日々

横道文哉

遠征から約1年が経ち、感想文執筆の依頼が届いたのは5月頃のことだった。当時、私は唯一の新社会人として4月から働き始め、怒涛の業務に追われる毎日を送っていた。気づけば締め切りをずるずると先延ばしにし、振り返った時には9月。あの遠征からちょうど1年が経っていた。

あの遠征は、準備期間を含めた1年半のすべてが、私の23年という短い人生の中で最も冒険的で、そして楽しい時間だった。登頂という結果はもちろん大きいですが、それ以上に仲間と積み重ねた日々や、そこに至るまでの道のりこそが、今思えば眩しく輝く青春だった。

思い返せば私と中沢は立教隊の一員として、2022年のプレモンスーン期にラムドウンピークへ挑戦した。登山を始めてまだ2年にも満たない私たちは、知識も経験も乏しく、体力も不十分だった。結果はシェルパの判断で撤退。もちろんその決断は正しかったが、「もっと気象や雪崩、クレバスへの対応を学んでいたら違う結末があったのではないかと、帰路で立ち寄ったコルカタの街で悔しさを噛みしめたことを今でも覚えている。

帰国して間もなく、私は初めて学生部の集まりに顔を出した。そこで井之上から「俺は未踏峰に行く。一緒にやらないか」と声をかけられた。迷いはなかった。二つ返事で参加を決め、中沢を必死に説得して呼び戻し、大学3年の5月頃に遠征隊が結成された。

準備の過程では、休学をめぐる話題が何度

も持ち上がった。仲間たちは皆、山に専念するため休学を決意していたが、就職活動も重なる学年であり、両親に休学の希望を伝えたときは反発を受けた。「山なんて遊びだろ」「就活はどうする」「そんなことしても何の役にも立たない」——厳しい言葉を浴びせられ、胸が痛んだ。それでも両親は最終的に休学を認めなかっただけで、山に行くこと自体を止めはしなかった。私は「就活と未踏峰」という二足のわらじを履く道を選ぶことにした。現地での登攀は井之上や尾高に頼ることを自覚していた私は、渉外やエージェントとの交渉など、バックオフィスの役割を引き受けた。毎日のようにラムさんとLINEでやり取りし、航空券の価格とにらめっこしながら、どうにか費用を抑えようと奔走していた。

参加できたトレーニング山行は数少なかったが、その一つひとつが強く心に残っている。屏風岩の帰り道でバスに乗り遅れ24キロ歩いた時、罵声が飛び交った冬の八ヶ岳、鎮痛剤でごまかしながら登った早月尾根——。どれも仲間の存在があったからこそ成し遂げられた、最高でクレイジーな経験だった。チームの雰囲気は和やかで、衝突もほとんどなく、笑いの絶えない日々だった。(もっとも、芦沢がベースキャンプで尾高を避けていたようにも見えたが(笑))。

就職活動では、山の経験を話したことで、恐らく「体力がある」と評価され、第一志望に合格することができた。そして気づけば遠

征は目前に迫っていた。

出発直後は緊張感に包まれるかと思いきや、私と中沢は懐かしさにも似た感覚に襲われていた。一方で井之上、尾高、芦沢は目を輝かせ、タメル地区での準備期間を楽しんでいた。遠征中には大小さまざまなトラブルもあったが、雰囲気は常に明るく、修学旅行にも似た空気感だった。ベースキャンプでもふざけ合い、ハイキャンプでは言葉少なになりながらも、決して険悪な空気にはならなかった。体力不足に悩まされていた私にとって、それは何よりありがたかったし、仲間への感謝は尽きない。

振り返れば、最大の後悔は自分の体力不足にある。なんとか隊に遅れずついていくことはできたが、登攀では大きな貢献もできず、悔しさが残った。就活中もずっと追い込んでいればと何度も思った。順番的にたまたま先頭に立って山頂を踏ませてもらったが、そのことにさえ、少し複雑な気持ちが残った。それでも登頂の喜びは大きく、皆で達成できたことは何よりも嬉しかった。

意外だったのは、登頂した瞬間には実感が湧かなかったことだ。これは他のメンバーも同じで、ベースキャンプに戻って翌日になってから、ようやく胸に込み上げてきた。

帰国後は激しい燃え尽き症候群に陥った。大きな目標を失い、ただダブルブーツと運転免許合宿のローンを返すだけの日々。未踏峰を追っていた頃の煌めきが消えてしまったよう

に思えた。しかしそれは、日常が戻っただけのことでもあった。そして、また新たな目標を探す時期に入ったのだと気づくようになった。

もしかしたらこれを読んでいる学生のなかには様々な理由で遠征や何かしらの挑戦を諦めている人がいると思う。しかし私自身、就職や資金、体力など多くの課題を抱えながらの遠征だったが、がむしゃらに努力を続けることで何とか乗り越えることができた。何事も、やる前から諦めてしまうのではなく、筋道を立てて挑戦してみれば道は開けることもある。だからこそ、諦めずに粘り強く挑み続けてほしい。

これからは、社会人として仕事を覚えながら、隙間時間で体力を鍛え直していくつもりだ。次なる目標は山だけに限らず、この経験を糧に世界を見て回ることでもある。ヒマラヤで実感した世界の広さ、そして一度きりの人生を大切にしながら、多くの経験を重ね、後輩を支えられる存在となれるよう日々邁進していきたい。

その遠征、俺も行きたいです！

芦沢太陽

2023年春、学生部の例会を終え、居酒屋での懇親会に参加した時だった。「学生部で未踏峰遠征をやりたい」そんな話題になった。興味はあったが、当時の私は登山経験1年のひよっこで、「自分にはまだ早い」と、その会話をどこか他人事のように聞いていた。

後日、正式に学生部で遠征隊を組織することが決まったようで、例会で井之上さんから隊員の募集があった。「2年生以上が対象で、現在の登山の実力は問わない。やる気がある奴に来てほしい。」4月を迎えて2年生になっていた私は、その言葉を聞いて思わず、参加希望の手を挙げていた。そして、意欲を買われ、唯一の下級生隊員として迎えられることになった。ついこの前まで、遠く離れた存在だと思っていた未踏峰が、未熟な自分にも門戸を開いている。そう思うと気分が高揚せずにはいられなかった。

それ以来、一人前のメンバーになるために必死に奔走した。私以外のメンバーはみな1学年上なこともあり、その差を少しでも埋めようと1日でも多く山に入り、必要とされる技術、知識、体力を少しずつ身に付けていった。

出国までの時間はあっという間だったが、目標を達成するために必要なこと、自分にできることは全てやりつくしたと思う。それが遠征本番でも心の支えになり続けた。おかげで、全力で挑んだ1回目のアタックが敗退となった時も、落胆することはなかった。頂上稜線までの情報を得たのだから、次は必ず登れる

はずだ。そのための準備をしてきたじゃないか。そう強く信じていた。

そして、2回目のアタックでプンギの頂を踏んだ時、登頂したこと自体よりも、登頂するために取り組んできたことが間違っていなかったと証明できたことが嬉しかった。

2ヶ月にわたる遠征中、我々の隊は世界中のどの登山隊よりも優れたチームワークと仲の良さだったに違いない。ケンカは一度もなく、しょうもないことで笑いあい、言葉を交わさずともお互いの考えていることがたいてい分かっってしまう。最高の仲間だと思う。この5人が誰一人欠けることなく山頂に立つことができて本当に良かった。

2022年春、大学生になった私は中央大学山岳部の門を叩いた。それまで登山と縁もゆかりもない生活を送っていた私が、なぜ山の世界に飛び込んだのか。正直、自分でもよくわからない。だが、未踏の高峰に挑むということに漠然とした憧れがあったことははっきりと覚えている。未踏峰登頂への『憧れ』は、幾度もの登山を重ねていく中でいつしか『目標』に変わり、そして『現実』になった。この世の中は、やりたいことが何でもできるわけではないし、努力の積み重ねをしても手に入らないものだってある。それでも、強い志を持って一生懸命に何かに取り組むことが大事なのだと、この遠征は教えてくれた。今回の登山が、「次につながる登山になる」よう、これからも様々な形で山と向かい合いたい。

2024年日本山岳会学生部ブンギ遠征隊 特別謝意（敬称略）

在京本部

平川陽一郎（日本山岳会）
 原田智紀（日本山岳会）
 池田功（日本山岳会）
 松原尚之（日本山岳会）
 村上正幸（青山学院大学山岳部）
 吉田一貴（中央大学山岳部）
 降矢蒼玄（東京大学スキー山岳部）
 神保修麻（立教大学山岳部）

ヒマラヤキャンプ2022登山隊

後藤希介（リーダー）
 加ヶ見太地
 安達正貴
天気予報
 猪熊隆之（株式会社ヤマテン）

2024年日本山岳会学生部ブンギ遠征隊 ご協力者（敬称略）

公益社団法人日本山岳会	個人（順不同）		
青山学院大学山岳部	イワイ ツギオ	クラモト ユウスケ	ナガト マサノリ
中央大学山岳部	イシカワ ツグオ	クロカワ サトシ	ニシナ ケンタ
東京大学スキー山岳部	イズミ ジュン	コイケ チアキ	ニシザワ ナオシ
立教大学山岳部	イソザキ カナ	コウノ ナオコ	ニシヤ タカノブ
青山学院大学山岳部 OB 会	イノクマ タカユキ	コウノ マサル	ニトウ マサオ
中央大学山岳部 OB 会	イノウエ	コバヤシ マサ	ノグチ シュウジ
東京大学スキー山岳部 OB 会	イノウエ ヨシカゲ	コバヤシ ヨシ	ハタナカ タツト
立教大学山岳部 OB 会	イワタテ ミツオ	サカイ	フカサワ トオル
株式会社 finetrack	ウチダ ヒロシ	ササキ エイイチ	フジオオジ ヨシオキ
株式会社 ケンコー社 (BLUE ICE/FITS)	ウチヤ ユキトシ	サルワタリ ヨウタロウ	マエダ イクマサ
尾西食品株式会社	エンドウ シュンイチ	シマヅ マサミチ	マスタニ サトシ
野田岩	オオタニ タカシ	セキネ ユタカ	マツザワ トシ
	オオタニ リヨウ	セツダ ジュウセ	マツバラ マサユキ
	オオバ ヒロマサ	タカイ ノブユキ	マツヤ シンイチ
	オオノ マサヒト	タカハシ カツマサ	ミシナ ユウジ
	オガタ イクエイ	タカハシ ケイスケ	ミヤハラ ヒロシ
	オザキ	タカハシ ナルト	ミヤモリ シンヤ
	オバタ トシエ	タカノ マサミチ	ヤスダ マサヒロ
	カク カゲヒデ	タカハラ サンペイ	ヤハタ ヒロシ
	カトウ キヨシ	タケハラ ソウミツ	ヤマモト マサヨシ
	カマエ ツネヨシ	タナカ ジュンイチ	ユザワ タカオ
	カメオカ ヨシタ	ツチヤ アキラ	ヨシイ ヒデキ
	カミザワ アキラ	ツチヤ タカアキ	ヨシカワ マサユキ
	キシ モトオ	トウヤ	ヨシダ リイチ
	キタムラ ヤスゾウ	トミタ ヒロサト	ヨシダ ユミ
	キュウシン ダイシ	トリウミ ノブカズ	ワカバヤシ ユウ
	クガ ヨシアキ	ドイ ユウコ	ワタナベ ケンジ
	クボ ユタカ	ナカハラ ユウジ	ワタナベ タカネ
	クムラ トシユキ	ナカムラ	ワタナベ ユウシ

2024日本山岳会学生部プンギ遠征隊 報告書

FIRST ASCENT

発行 日本山岳会学生部プンギ遠征隊

編集 井之上巧磨

デザイン 井之上巧磨

写真 隊員一同

発行日 2025年10月12日

*乱丁、落丁などの不良品はお取替えすると思います。たぶんね...

*この本は環境に特に配慮せず作りました。読んだ人はゴミでも拾ってください。

*ここまで読んでいるあなたは立派な暇人です。早くボルダリングでも行きましょう。

*遠征に行く全ての人を心より応援してます！気を付けて頑張って下さい。